Charlie
AND THE
CHOCOLATE
FACTORY

WONKA
チャーリーとチョコレート工場
2005年アメリカ映画／2005年日本公開作品／115分／6巻／3,151m／ビスタサイズ
SR/SRD/DTS/SDDS／字幕翻訳:瀧ノ島ルナ／吹替版翻訳:藤沢睦美／ワーナー・ブラザース映画配給
サントラ盤:ワーナー・ホーム・ビデオ／原作:「チョコレート工場の秘密」(評論社)
www.charlie-chocolate.jp
VILLAGE ROADSHOW PICTURES
PLAN B
WARNER BROS. PICTURES
©2005 Warner Bros. Ent. All Rights Reserved

Charlie AND THE CHOCOLATE FACTORY

Introduction

デップ×バートンでしかあり得ない全世界注目のプロジェクト、ついに実現！
さあ、世界一オカシな工場見学へ！

絶賛のロング・ベストセラーは、
この２人に映画化されるのを待っていた!!

　『パイレーツ・オブ・カリビアン／呪われた海賊たち』『ネバーランド』と、2年連続でオスカーにノミネートされ、今まさに注目度も人気も世界No.１のジョニー・デップが、最高のパートナーとも言える鬼才、ティム・バートン監督とタッグを組んだ最新作『チャーリーとチョコレート工場』。２人が挑む原作は、このコンビならばこそとの呼び声も高いカリスマ的名作「チョコレート工場の秘密」。ロアルド・ダールが著した奇想天外な物語は、発表から40年たった今も人気が衰えず、イギリスでは、「ハリー・ポッター」シリーズ、「指輪物語」に次いで“子供が好きな本”の第３位にランクイン。夢中になるのは子供だけではない。大人ゴコロを串刺しにする容赦のないブラックユーモア、ひと癖もふた癖もある登場人物たち、一度読んだら忘れられない強烈なインパクトが溢れかえり、熱狂的ファンは跡を絶たない。またとない組み合わせの最高コンビが、その真価を発揮するにこれ以上ない原作と出会ったとき、いったい何が起こるのか？　世界中で試食待ちのチョコレートが、ついに生産を開始する！

イマジネーションが縦横無尽に駆け巡る！
ありきたりな日常を侵食する、魅惑のミラクル・ワールド！

　噂の極秘工場、ついに世界公開へ。
「ウォンカ製の板チョコに入っている“金のチケット”を引き当てた5人の子供に、工場の見学を特別に許可する」
世界でもっとも有名で、世界でもっとも謎めいている、それがウィリー・ウォンカのチョコレート工場。この15年間、工場に入った者もいなければ、出てきた者もいないのだ。それでも毎日大量に出荷され世界中で飛ぶように売れているウォンカ・チョコ。このチョコレート工場に隠された途方もない秘密とは？ はたして、金のチケットは本当に幸運の鍵なのか！？
　工場の内部は、まさに溢れ出すイマジネーションの洪水。鬼才ロアルド・ダールの並外れた想像力を映像化するのは、これまた並外れたティム・バートンの尋常ではないこだわり。できる限り本物にこだわったプラクティカル＆バーチャル・エフェクトが創り出す比類なきウォンカの不思議世界！　今、その待望の扉が開く！いったん足を踏み入れたら戻ってこられる保証はゼロ。既存の感度はフリ切れ覚悟、病みつき必至の新天地！　一度は味わってみずにいられない、キッチュでマッドなスペシャル・レシピは、意外にも(？)ホロリとさせる感動の隠し味をじわりときかせて、あなたのハートを魅了する！

チャーリー・バケット少年(フレディー・ハイモア)の家の貧しさといったら、それはもう大変なものでした。大きな町のはずれにある、左に30度くらい傾いた今にも壊れそうな小さな家に、一家7人で暮らすバケット家。失業中の父(ノア・テイラー)と、母(ヘレナ・ボナム=カーター)と、チャーリー、それに祖父母がふた組。7人のうち4人がほぼ寝たきりの老人で、家にたったひとつしかないベッドには合計年齢381歳の弱りきった4つの体が互い違いに横たわっています。夕食といえば限りなく水に近いキャベツのスープだけ。しかも、日曜日以外はお代わりもできません……! 信じられないかもしれませんが、それでもチャーリーは幸せでした。年に一度、誕生日のときにだけ買ってもらえる大好きなチョコレート。そのたった1枚の小さな板チョコを、チャーリーは1か月かけて少しずつ少しずつちびちびと食べるのです。ああ、なんとけなげなチャーリー少年! そんなチャーリーの家のすぐそばに大きなチョコレート工場がありました。それもただのありふれたチョコレート工場ではありません。世界で一番大きくて、世界で一番有名なウォンカのチョコレート工場です。ここ15年間というもの工場の門は閉ざされ、中に入った人も出てきた人もいないのに、世界的ヒット商品を毎日出荷し続ける謎のチョコレート工場。学校への行き帰り、甘い匂いだけをかがされながら、おなかを減らしに減らしたチャーリーは思います。あの工場の中に入って、どんなふうになっているのか見られたらいいのに。

そんなある日、驚くべきニュースが世界中を駆け巡りました。

「ウォンカの工場ついに公開! 幸運な5人の子供たちに見学を許可」

ウォンカ製のチョコレートに入った"金のチケット"を引き当てた5人の子供とその保護者を特別に工場に招待する、と工場主のウィリー・ウォンカ氏(ジョニー・デップ)が異例の声明を発表したのです。世界中が目の色を変えるなか、次々と現われる当選者たち。

1人めは、食い意地でパンパンに膨らんだ肥満少年。チョコレートを食べて食べて食べて、金のチケットを手に入れました。

2人めは、癇癪持ちで、大金持ちのわがまま娘。父親の財力をもってすればチョコレートの買い占めも思いのまま。金に飽かせて金のチケットを"お買い上げ"です。

3人めは、ありとあらゆる賞を獲得することに執念を燃やす賞獲り少女。これまでに獲得したトロフィーの数263個。現在はノンストップでガムを噛み続ける世界記録に挑戦中。常に勝つことをけしかけるステージママとタッグを組んで、チケットを奪取しました。

4人めは、頭の良さをひけらかすゲームおたくの少年。「チョコの製造年月日と天候による増減と日経平均(!)」を研究して金のチケットのありかを突きとめ、「そんな計算はどんなバカでもできるはず」とうそぶく大変むかつく子供です。

4人の当選は世界中を羨ましがらせるとともに、みんなをいやーな気分にさせました。残るチケットはあと1枚。年に一度しかチョコレートを買ってもらえないチャーリーが当選する可能性は、夕飯のキャベツスープより薄いものでした。ところが、道端で拾ったお金が幸運を呼び、最後の1枚が、なんとチャーリーの手元に転がり込んできたのです! 寝たきり祖父母のひとりで、昔、ウォンカ工場で働いていたという輝かしい過去を持つジョーおじいちゃん(デイビッド・ケリー)は、当選の知らせに、突如、生き返ったようにベッドから跳ね起きました。

さて、いよいよ工場見学の日。ジョーおじいちゃんに付き添われたチャーリーと、絶対にひと悶着起こしそうな4組の親子を出迎えたのは、15年も工場に引きこもっていた伝説の工場主ウィリー・ウォンカ氏その人。前髪揃えのおかっぱ頭にシルクハットをかぶり、歓迎用の笑顔を青白い顔に貼りつけたウォンカ氏に導かれ、一同が目にした光景は——。工場内を流れるチョコレートの川、ねじれたキャンディー棒でできた木、ミント・シュガーの草花、砂糖菓子の舟、そして、そこで働くウンパ・ルンパたち……。誰もがつばを飲み、目を見張る極彩色のミラクル・ワールドで、時代遅れのスラングを連発しながら嬉々として自慢の工場を案内するウォンカ氏が、時々遠い目をするのはなぜ? そして、個性的すぎる5人の子供たちを待ち受けている、それぞれの運命とは——?

Story

Willy Wonka

ウィリー・ウォンカ
完璧な歯並びを誇る天才ショコラティエ。20年前、町にチョコレートショップを開店するや否や、オリジナル商品がたちまち大人気に。世界最大のチョコレート工場を建てるに至る。ところが同業者のスパイにレシピを盗まれてしまい、とうとう全従業員に帰宅を命じたうえ工場を閉鎖。その後、門を閉じたまま操業を再開、謎めいた生活を送っている。なぜか「両親」なる言葉に口ごもり、ときおり遠い目をする彼が、子どもたちを招待した目的は!?

Dr. Wonka

ドクター・ウォンカ
かつては町で一番有名な歯科医として鳴らす。ひとり息子ウィリーの歯の健康を気遣うあまり、「天敵」スイーツを心底憎む過保護ぶりも話題に。ハロウィンだろうと何だろうと、天敵が息子の口に入ることは断じて許さない主義。チョコレートショップを開きたいという息子の夢には、もちろん大反対。ウィリーがプチ家出を決行するや否や、絶縁宣言。息子もビックリするほどの有言"即"実行派。とはいえ誰よりウィリーを愛している。

Charlie Bucket

チャーリー・バケット
足の速さも腕力も人並み、ついでに頭の出来も人並みなチョコレート大好き少年。チョコレート工場への憧れを、ミニチュア模型に託す。ただしチョコを買ってもらえるのは1年に一度、自分の誕生日に1枚きり。そんな貧しい家庭の生まれながら、仲よしのパパとママ、そして2組の祖父母の愛情を一身に受けて育ち、1枚のチョコを家族みんなで分け合う、やさしい心の持ち主に成長。けれどウォンカのヘアスタイルはイケてないと内心思っている。

Grandpa Joe

ジョーおじいちゃん
若いころ、門が閉じられるまでウォンカのチョコレート工場で働いた経験をもつ。天才ウォンカの素顔を知る彼は、数々のエピソードを最高の思い出として語り、愛着を感じている。なけなしのへそくりをチャーリーに渡す、孫思いでもある。ほとんどベッドに寝たきり状態ながら、工場に再び入れると知るや、再び元気を取り戻すゲンキンな一面も。うれしいときの口ぐせは「よっしゃ！」。ほか3人の祖父母と合わせて381歳、ってことは推定90代半ば!?

Mr. and Mrs. Bucket

バケット夫妻
お金も地位も人脈もなく、毎日の食費にも事欠く貧しい夫婦。とはいえ夫婦の愛情は人一倍。低賃金で歯磨き粉工場のキャップかぶせ係として働く夫を、妻はキャベツスープで節約しながら支えている。息子にはときおり、キャップの不良品をお土産に持ち帰るやさしいパパ。けれどチョコレートの売り上げ増加に伴い虫歯が増え、歯磨き粉も売り上げが急増。彼の勤務先の工場はその利益で機械化を進めたため、とうとう失業してしまう羽目に。

Veruca Salt

ベルーカ・ソルト
イギリスのバッキンガムシャーに暮らす、verruca（いぼ）と同じ発音の名を持つ資産家令嬢。両親に甘やかされて育ち、何でもかんでも自分のモノにしないと気が済まない、欲しがり屋さん。9歳にしてポニーと犬2匹、猫4匹とウサギ、インコ、カナリヤ、オウム、カメとハムスターをペットに持つ。

Mr. Salt

ソルト氏

妻とともに娘ベルーカを甘やかし放題。<ゴールデン・チケット>を欲しがる娘のため、何十万個ものチョコレートを買い占める。おまけに自身のナッツ工場の従業員を総動員して、チョコレートの包み紙を開けさせた親バカ王。

Violet Beauregarde

バイオレット・ボーレガード

ジョージア州アトランタに暮らす、チューインガム噛みの世界ジュニア・チャンピオン。自慢は部屋中にあふれるトロフィー。獲得した263個の賞のうち、ほとんどがガム絡みのコンテスト。目下、ノンストップでガムをかみ続ける世界記録に挑戦中の、野心家娘。競争心は人一倍で、「特別賞を取るのは私」「私は勝ち組」と豪語する自信家でもある。

Mrs. Beauregarde

ボーレガード夫人

「この親にして、この娘あり」の典型的見本。性格やファッション、ヘアスタイルだけでなく、娘のバイオレットとおそろいの立派なアゴを持つ、長身のスポーツウーマン。ただしこちらの専門はバトン・トワリング。

Mike Teavee

マイク・ティービー

コロラド州デンバーに暮らす、ハイテク世代の申し子。天候と株価の動きを参考に、製造日から<ゴールデン・チケット>の所在を確定。チョコレートを1枚買っただけで当てた頭脳派の13歳。しかも「チョコレートは食べない」と言い切る可愛げのなさが特徴。知ったかぶりのビデオゲームおたく。モゴモゴとした口調でいちいち文句をつけるため、ウォンカの神経を逆なで。

Mr. Teavee

ティービー氏

息子マイクの言うことはさっぱり理解できないと語る、高校の地理教師。マイクに見下されていると感じながらも、どうにもできない気弱な父親。

Augustus Gloop

オーガスタス・グループ

ドイツのデュッセルドルフに暮らす、チョコレートが大好きな9歳の少年。ただし身体は大人以上の相撲レスラー級。毎日チョコレート三昧で、<ゴールデン・チケット>もいっとう最初にゲットする。食い意地の張った食いしん坊、おまけに自分のモノは何ひとつ人にあげたくないケチん坊。

Mrs. Gloop

グループ夫人

「息子オーガスタスがチケットをゲットすると信じていた」と語る、スイーツを与え放題のダメ母。しかも息子の無謀なまでの暴食を止められないばかりか、彼の不健康な肥満体にも我関せず、といった様子。やはりコレステロール過多、ついでにメイクもファッションも暑苦しい。

TEXT BY 柴田メグミ(ライター)

お菓子の天才ウォンカの世界

ウォンカが生んだオリジナル品

チョコレートの宮殿
インドのポンディシェリー王子のリクエストにより、ミルクとブラックのチョコレートだけで造った巨大な宮殿。チョコのレンガを積み、チョコのセメントで固めた、カーペットも絵も家具もチョコレートずくめ。ただし高温には注意。

めちゃうまチョコ
ウォンカ社の定番人気商品。正式名称は＜WONKA Whipple-Scrumptious Fudgemallow Delight＞。名前の由来は「超おいしい」「ファッジ」「マシュマロ」から。チャーリーも特にお気に入りのチョコレートバー。

チョコ鳥
ウォンカが町でショップを開いていた時代の一番の人気商品。卵型のキャンディが孵化すると鳥の形のチョコレートになる。人間の口の中でキャンディを温めると、より早く完成。

不思議なチョコアイス
冷凍庫の外でも溶けない、カンカン照りの太陽の下でも凍ったまま決して溶けない驚異のアイスクリーム。その後、スパイに秘密のレシピを盗まれ、フィクルグルーバー社が類似商品を発売。

味の消えないガム
ウォンカが発明したものの、スパイに秘密のレシピを盗まれ、プロドノーズ社が類似商品を発売。

とてつもなく膨らむ風船ガム
ウォンカが発明したものの、スパイに秘密のレシピを盗まれ、スラグワース社が類似商品を発売。

永久に溶けないアメ
1個買えば、永久になめられる。お小遣いが少ない子供用に、ウォンカが発明。噛むと歯が折れるので危険。＜不思議なチョコアイス＞の秘密レシピを応用したと推測される。

毛はえアメ

1かけら口に入れ、きっかり30分たつとフサフサの髪の毛が頭から生えてくる。頭だけでなく、口ひげもアゴひげにも効果を発揮。ただし未完成品なため、身体中が毛だらけになる場合も想定の範囲内。

フルコース・ディナーガム

宇宙初、センセーショナルな不思議なガム。台所も料理も不要になるよう、ウォンカが発明。1枚噛んだだけで朝・昼・晩の3度の食事に匹敵、スープにメイン・ディッシュ、デザートまでフルコース・ディナーの味も楽しめる。ただし副作用あり。

チョコレート工場の秘密

チョコレートの滝

最高級の熱いチョコレートをかき混ぜて、フンワリ軽い食感にする重要なポイント。世界中にチョコレート工場はあまたあれど、滝を応用しているのはウォンカの工場だけ。

ナッツ選別室

殻むきの特訓をしたリスが選別を行う部屋。リスたちはクルミを無傷で取り出せるうえに、たたいて中味の良し悪しを調べるスゴ腕を発揮。悪い実はダストシュート行きになる。

テレビ室

テレビで写真を無数の断片に分解し、送信して再結合できるならチョコレートだって可能なはず——と、ひらめきテレビ転送装置を発明。CMで流れた商品がテレビを通して視聴者に送られ、すぐに食べてもらえるという仕掛け。欠点は特大サイズで送ったチョコレートが、途中で縮んでミニサイズになってしまうこと。たまに半分、迷子になることもある。

ガラスのエレベーター

エレベーター全体が頑丈な透明ガラス張り。押しボタンの多さに誰もがビックリ仰天。上下左右、前後に斜めと、多方向に自在に動く。しかもひとっ飛びのスピードを誇る。外へ行くことも可能で、ウォンカは長年、「外」ボタンを押す日を待ち望んでいた。

TEXT BY 柴田メグミ

Oompa-Loompas 魅惑のウンパ・ルンパ ソング

Augustus Gloop

オーガスタス・グループ

おデブなオーガスタスの歌は、エスニックなビートとホーンセクションが絶妙に絡んだ、まるでお祭り気分のカラフルなナンバー。ルンパランドのお祭りで、太鼓を叩きながら唄って踊るなら、きっとこんな曲のはず。さらに往年のミュージカル『水着の女王』(49)を思わせる、一糸乱れぬ水中レビューならぬチョコ中レビューは、暑苦しさ全開！

♪オーガスタス・グループ、
オーガスタス・グループ、
ドデブで意地汚い愚か者
オーガスタス・グループ、
小汚いデブ 卑しい むさい 赤ん坊

よし、もう決めた 時は熟した
この子をパイプで打ち上げろ！

でも子供たち、心配無用
オーガスタス・グループは無事戻る
オーガスタス・グループは無事戻る

白状すると それでもやっぱり
彼はすっかり変身するよ
ゆっくり機械が回り始めて
歯車の歯が砕いてつぶす

この食い意地の張った嫌われ者が
世界中の人たちに愛されるのさ
だっておいしいチョコのお菓子を
忌み嫌う人などいないもの

Violet Beauregarde

バイオレット・ボーレガード

野心家バイオレット・ボーレガードに捧げるのは、70年代のディスコ・サウンド調のキャッチーなファンク・ナンバー。ウンパ・ルンパのダンスもまさにディスコで、ジャンプ・スーツでの決めポーズがいかしてる。でも、このダンスのまとまりぶりを見たら、チャーリーならずとも「絶対、前もって練習していたはず」と疑いたくもなる？

♪耳を傾けて よく聞いて
バイオレット・ボーレガードの物語を
しとやかな彼女は危険性に気づかず
噛んで噛んで噛み続けてる
日がな一日噛み続けてる
日がな一日噛み続けてる
日がな一日噛み続けてる
日がな一日噛み続けてる

ガムをあんまり噛みすぎて
ついにはアゴが筋肉モリモリ
彼女の顔から巨大なアゴが
バイオリンみたいに突き出しちゃった

日がな一日噛み続けてる
日がな一日噛み続けてる
日がな一日噛み続けてる

何年も何年もひたすら噛んで
アゴの力は日々増すばかり
そして渾身のひと噛みで
哀れな少女の舌はまっぷたつ
だから僕らは必死に頑張っているのさ
ミス・バイオレット・ボーレガードを
救おうと

日がな一日噛み続けてる
日がな一日噛み続けてる
噛んで噛んで噛み続けてる
日がな一日噛み続けてる
日がな一日噛み続けてる

ウンパ・ルンパとは？

ウィリー・ウォンカが新しいお菓子の原料を求めてたどり着いた、遠い遠い南の国ルンパランドの住人。彼らこそがチョコレート工場の原動力だ。食糧事情の悪いルンパランドではイモ虫が栄養源で、カカオ豆が大のごちそうであることを知ったウォンカは、ウンパ・ルンパ族にチョコレート工場で働くことを提案。報酬は、チョコレートの原料であるカカオ豆を好きなだけという条件で契約した。身長は平均75センチで、とても身軽。歌とダンスが得意で、集団行動を好み、男女で外見的な差があまりないのが特徴。

Veruca Salt

ベルーカ・ソルト

ベルーカのわがまま娘振りを揶揄する歌詞とは正反対に、後期ビートルズを思わせるサイケで甘いメロディーと、トッド・ラングレンを彷彿とさせるコーラス・ワークが魅力的なナンバー。ウンパ・ルンパたちのダンスも、ちょっと乙女が入ってラブリー（彼らの男女構成比は不明だが）。リスちゃん並にかわいいかどうかは……？

♪ベルーカ・ソルト イヤミな小娘
たった今ダストシュートに
落ちてった

落ちる途中で出会うだろう
一風変わった友達に
一風変わった友達に
一風変わった友達に

たとえば一つに魚の頭
今朝カレイから切り落とされた
カキのシチューのカキの貝殻
誰も噛めない固いステーキ
他にもまだまだたくさんあるが
どれもキョーレツな臭いを放つ
キョーレツな臭いを放つ

それがベルーカの新しい友達
落ちる途中で彼女が出会う
それがベルーカの新しい友達

誰が彼女を甘やかしたの？
何でも言いなりに与えた人は？
彼女をあんな悪ガキにしたのは？
犯人は誰なの？
誰がやった？

有罪なのは悲しいことに
優しいママと 愛情深い…パパ

Mike Teavee

マイク・ティービー

チョコ嫌いのゲーム・マニア、マイクに捧げる歌は、クイーンの「ボヘミアン・ラプソディ」にそっくり！ 70年代のフレディ・マーキュリーもびっくりのロングヘアをなびかせ、ウンパ・ルンパがロック・オペラを熱唱する。ギターもドラムもキーボードも、もちろんウンパ・ルンパ。ただし本家と違い、胸毛はあまり濃くないらしい。

TEXT BY 石津文子（文筆家）

♪私たちが学んだ 一番大切なことは
子供たちのことで 私たちが学んだ
一番大切なことは 絶対に彼らを
テレビに近づけないこと
もっといいのは
あのバカげたものを 家に置かないこと

絶対に近づけないで 絶対に近づけないで
絶対に近づけないで 絶対に近づけないで

頭も感覚も鈍らせる 想像力を葬り去る
心をガラクタで一杯にする
薄ぼんやりと目はうつろ
薄ぼんやりと目はうつろ
もう理解できない
空想の国もおとぎ話も
空想の国もおとぎ話も

脳ミソがチーズ状態
思考力がさびつき凍る
考えられずにただ目で見るだけ
小さくなったマイクのことは
今のところは残念ながら 残念ながら
成り行きを見るしかない
成り行き 成り行き 成り行き
成り行き 成り行き 成り行き

今のところは残念ながら
成り行きを見るしかない
元の大きさに戻せるか
でももしダメなら いい気味だ

Profile

ティム・バートン(監督)

1958年カリフォルニア州バーバンク生まれ。若くして絵を描き始め、ディズニーの奨学金を得てカル・アーツ・インスティテュートで学んだ後、ディズニーのアニメーターに採用された。ビンセント・プライスによるナレーションの短編アニメ『ビンセント』(82)で監督デビュー。批評家から注目を集め、映画祭でも賞を獲得した。84年には実写短編『フランケンウィニー』を監督。
長編デビュー作『ピーウィーの大冒険』(85)では興行的に成功をおさめ、独創的な視点が称賛された。続く『ビートルジュース』(88)でも名実ともに成功を収め、89年には『バットマン』が世界的に大ヒット。全米劇場主協会からディレクター・オブ・ジ・イヤーを授与された。ジョニー・デップを初めて起用した『シザーハンズ』は90年クリスマスの大ヒット作となり、その独創性と切なく寓話的な演出が絶賛された。92年、再びゴッサム・シティの暗部を描いた『バットマン・リターンズ』はその年の興収第1位となった。
94年に監督・製作したジョニー・デップ主演の『エド・ウッド』では、マーティン・ランドーがアカデミー賞とゴールデン・グローブ賞の両助演男優賞に輝き、メイクアップ賞も獲得。監督・製作したSFコメディー『マーズ・アタック！』(96)にはジャック・ニコルソンをはじめ20人もの主役級俳優が出演した。ジョニー・デップ、クリスティーナ・リッチ主演の『スリーピー・ホロウ』(99)ではアカデミー賞の衣装デザイン賞と撮影賞にノミネートされ、美術賞を受賞。英国アカデミー賞でも衣装デザイン賞と美術賞を獲得した。2001年夏にヒットした『PLANET OF THE APES／猿の惑星』にはマーク・ウォールバーグやヘレナ・ボナム＝カーターが主演した。03年にはユアン・マクレガー、アルバート・フィニー主演で『ビッグ・フィッシュ』を監督。批評家からの絶賛を浴び、大ヒットした。
原案と製作を担当したストップモーション・アニメ『ナイトメアー・ビフォア・クリスマス』(93)は、毎年クリスマスに繰り返し鑑賞される名作となっている。その他の製作作品は『バットマン フォーエヴァー』(95)やロアルド・ダールの児童書に基づいたアニメ『ジャイアント・ピーチ』(96)など。
この秋には、再びストップモーション・アニメを手がけた監督作品『ティム・バートンのコープスブライド』が公開される。

TIM BURTON Director

Interview with TIM BURTON
ティム・バートン　インタビュー

ジョニーとの仕事は毎回さらに良くなる。まるでいいワインが熟成していくようにね。

――1971年作品『夢のチョコレート工場』をリメイクするというアイデアは、ずいぶん長い間ハリウッドでささやかれていましたね。
そのことは僕も知っていた。他の監督に決まったと聞いたことも何度かある。僕は原作本の大ファンだから、その都度、自分がその時やっている仕事に集中して、なるべくそんな話題は気にしないようにしていた。最終的に自分がオファーされた時はうれしかったよ。

――この本の、どんなところが好きだったのですか？
今の時代なら「ハリー・ポッター」があるけれど、僕が育った時代には、子供の本を書くことができる優れた作家というのが、そんなにいなかった。子供が持っている、奇妙で独特なビジョンを理解している作家がね。それにこの本は、大人になってから読んでも、また得られるものがあるんだ。

――原作本に忠実な映画にするというのが、最初からあなたの意向だったと聞いていますが。
そうなんだ。ロアルド・ダールが書いた原作本のスピリットをしっかりとらえたかった。この本にはすべてが書かれているが、同時に解釈の余地もたっぷりと残されている。たとえば、チョコレートの川の濃度はどれくらいなのだろう？ そんなディテールを考えるのは楽しかったよ。チョコレート工場の中にはいろんな部屋があり、どの部屋にもこだわれる部分があったけれど、アイデアのベースになるのはいつも原作本だった。

――一方で、映画の最後のほうに、原作にはない部分を足していますね。
ウィリー・ウォンカと父に関するくだりだね。あれを足したのは、ウォンカがなぜエキセントリックな人物になったのか、説明を加えたかったからだ。そうでなければ、ただの変な男で終わってしまう。

――一方で、ウォンカの母については、ひとことも語られませんね。
人は、自分で記憶を選んでキープするものだよね。自分で自分の古い記憶をたどってみると、すべてを覚えているわけじゃないと気付くはず。ヘビーな思い出ほど、強く心に残るんだ。夢と同じで、それ以外のものは、時間がたつにつれてだんだん薄れていく。
――ロアルド・ダールの未亡人であるフェリシティ・ダールは、製作にどれくらい関わったのでしょうか？
彼女の存在は重要だった。この本は、彼女の亡き夫が作り上げた、愛するベイビーのようなものだ。当然だろうけれど、彼女はこの作品が壊されないように、懸命に守ろうとしている。彼女は今回、僕のことをずっとサポートしていてくれたけれど、それでも、彼女が出来上がった作品を気に入ってくれるかどうか、内心不安だった。「映画、とてもよかったわ」という喜びの電話がかかってきた時、僕にとって、スタジオから同じことを言われるよりも、ずっと大きな安堵を感じたよ。

――ジョニー・デップとはもう何度もお仕事をされていますね。もともと彼の才能を開花させたのもあなたです。彼が今、世界的スターになったことを、どう思いますか？
『シザーハンズ』の時から、彼はいつも違うことに挑戦し続けてきた。『パイレーツ・オブ・カリビアン／呪われた海賊たち』の大ヒットも助けになって、今、人はようやく彼を理解したんじゃないかな。彼がいい役者であるということはそれまでも、業界内では知られていたのに、ハリウッドは保守的だから、こんなに時間がかかったんだよ。僕にとって、彼との仕事は、毎回さらに良くなっていく。まるでいいワインが熟成していくみたいにね。

――フレディー・ハイモアのキャスティングの経緯について教えてください。彼が『ネバーランド』でジョニーと共演していたことは、キャスティングの理由になりましたか？
キャスティングの時には、僕はまだ『ネバーランド』を観ていなかった。でも、オーディションの部屋にフレディーが入ってきたとたんに、「僕はチャーリーを見つけた！」と感じたよ。いざ仕事をしてみたら、彼はいい子役だというだけじゃなく、これまでに僕が一緒に仕事をしたことがある中で、もっとも優秀な俳優のひとりといってもいいくらいすばらしかった。逆にほかの子役たちの場合は、経験がないことがプラスになったね。業界慣れしたモンスターになっていなかったから（笑）。全員、本当にいい子たちだったんだよ。

――今回もまた、あなたならではのオリジナルなビジュアルの世界が展開されています。あなたはいったい、どういうところからインスピレーションを得ているのですか？
僕が思うに、インスピレーションというのは、若い時に得て、それが自分の中に残っていくんだと思う。昔見た映画、読んだ本、その時々に感じたフィーリング。それらいろいろなものが、今の僕にインスピレーションをくれているんじゃないかな。

TEXT BY 猿渡由紀（映画ライター）

Profile

ジョニー·デップ（ウィリー·ウォンカ）

1963年、ケンタッキー州オーウェンズボロ生まれ。ミュージシャンを目指してロサンゼルスに移る。『エルム街の悪夢』（84）で映画デビュー。その後、オリバー·ストーン監督の『プラトーン』（86）などに出演。87年からテレビシリーズ「21ジャンプ·ストリート」に出演してブレイクし、90年にジョン·ウォーターズ監督の『クライ·ベイビー』で初主演を努めた。

ティム·バートン監督の『シザーハンズ』（90）で一躍売れっ子となり、ゴールデン·グローブ賞の主演男優賞候補となった。『妹の恋人』（93）と、再びバートンと組み、批評家の絶賛を浴びた『エド·ウッド』（94）でもゴールデン·グローブ賞にノミネートされている。『ドンファン』（95）ではマーロン·ブランド、フェイ·ダナウェイと共演。ジム·ジャームッシュ監督の『デッドマン』（95）、アル·パチーノと共演した『フェイク』（97）で同世代では最高の俳優という評価を確立した。『パイレーツ·オブ·カリビアン／呪われた海賊たち』（03）ではジャック·スパロウ船長役を好演。アカデミー賞とゴールデン·グローブ賞の候補となり、全米脚本家組合賞の主演男優賞を受賞した。現在は続編となる『Pirates of the Caribbean : Dead Man's Chest』と『Pirates of the Caribbean 3』の撮影を行っている。マーク·フォースター監督の『ネバーランド』（04）では、「ピーターパン」の作者J·M·バリ役でフレディー·ハイモアと共演。アカデミー賞、ゴールデン·グローブ賞、全米俳優組合賞、英国アカデミー賞の候補となった。

他の主な出演作は、『アリゾナ·ドリーム』（93）、『ギルバート·グレイプ』（93）、『ラスベガスをやっつけろ』（98）、『ノイズ』（99）、『ナインスゲート』（99）、『ショコラ』（00）、『フロム·ヘル』（01）、『ブロウ』（01）、『レジェンド·オブ·メキシコ／デスペラード』（03）など。97年には『ブレイブ』で監督デビューを果たし、兄と共同で脚本も担当した。『スリーピー·ホロウ』（99）に続いて、本作でティム·バートン監督と4度目のコラボレーションを果たし、さらに秋に公開されるバートンのストップモーション·アニメ『ティム·バートンのコープスブライド』（05）では主人公の声を担当している。

Interview with JOHNNY DEPP
ジョニー・デップ　インタビュー

ウォンカの役作りには、子供向けテレビ番組の「お兄さん」たちからインスピレーションを得た。

――この映画に出演を決めた理由を教えてください。
いくつかあるけれど、最大の理由はティム・バートンが監督することだったな。ティムとまた一緒に仕事ができるというのは、僕にとって最高の喜びなんだ。もちろん、この物語そのものも魅力だった。こんな素敵な機会はないと思ったけれど、同時にそこには大きなリスクが存在することもわかっていた。

――どんなリスクですか？
原作本は、世界的に愛されているベストセラー。そして、1971年に製作されたジーン・ワイルダー主演の映画『夢のチョコレート工場』にも、ファンがたくさんいる。僕自身も、9歳か10歳で初めてあの映画を観て以来、毎年のように観続けて育ったし、ジーン・ワイルダーのファンでもある。今回僕らは、ジーン・ワイルダーに敬意は払いつつ、そことはまったく違うところへ、このキャラクターを連れて行かなくてはいけなかったんだ。

――ウィリー・ウォンカの役作りには、どのようなプロセスがあったのですか？
僕とティムがこの映画をやると決めた段階では、まだ脚本も書かれていない状態だった。だから、僕らは原作本を元に、いろいろとアイデアを練った。もともと、ロアルド・ダールの原作本に、より忠実な映画を作ろうというのは、ティムの意図でもあったしね。ウィリー・ウォンカというのはどんな男だろうかと考えるうちに思い出したのが、5、6歳の時に観ていた、テレビの子供向け番組の「お兄さん」。独特のイントネーションで「グッ～ドモ～ニング、チルドレン」なんて言って現れる（笑）。子供心に、なんだか奇妙な人だなあと感じていたものさ。それに、クイズ番組の司会者も参考にしたね。彼らにはどこか、暗い陰りのようなものがある。そこからもインスピレーションを得たんだ。

――あのおかっぱのヘアスタイルも自分でデザインされたのですか？
このキャラクターにぴったりなのはどんな髪型なんだろうとずっと考えていたんだが、撮影準備中の早い段階で、スケッチが描かれている時に、ボブで、非常に短い前髪をもつあのスタイルが思い浮かんだ。彼は孤立を好み、自分の意志で社会から隔離して生きてきた男だ。だから、話し方にしても髪型にしても、どこか古っぽくないといけない。彼が知っている世の中は、古い世の中で、今現在のものではないのだからね。

――ティム・バートンは、役者にたっぷり自由を与えてくれるようなタイプですか？
とてもね。脚本家のジョン・オーガストもそうだ。でなければ、僕は箱に閉じ込められたような気分を感じただろうね。いざ撮影に入っても、現場で何か「これは」というアイデアを思いついたら、僕は試してみずにはいられないんだ。どんな変なアイデアだって、1テイクだけやってみて、やっぱりおかしいとわかれば、脚本どおりに戻せばいいだけなんだし。ティムはそれをよく理解しているんだ。

――今回は子役がたくさん出てきます。子供たちとはうまくいきましたか？　とくに、フレディー・ハイモア君とは『ネバーランド』に続き2度目の共演ですが。
子供たちはみんな素晴らしかったよ。中には、一度も映画に出たこともない子たちもいたから、最初の10日くらいはちょっとびくびくして、お互いをチェックし合ったりしていたけど、その後はすっかり仲良くなっていたね。フレディーとは『ネバーランド』で友達になって、この映画を通じてさらに友情の絆を強めた。彼は、世界で一番クールな子供だよ。

――この映画のセットは壮大ですね。子供たちは感動したのではないですか？
なんでもCGで出来てしまう時代だけれど、ああやって実際にセットを作ったことの意義は大きかったと思う。子供たちは、自分の目でチョコレートの川を見たり、触ったり、匂いを嗅ぐことができるわけだから。実はあの匂いはひどいものだったんだけどね（笑）。もちろんCGも使われているし、その技術のすごさにも感謝している。

――ウォンカは子供の頃、父のしつけでチョコレートを食べさせてもらえなかったせいでチョコレート工場のオーナーになる、という設定ですね。あなたは自分のお子さんに、どれだけお菓子を食べてもいいか、厳しく指導して守らせるほうですか？
正直いうと、僕はちょっとその点で甘すぎるかもしれない（笑）。チョコレートを目の前にした時、子供って本当に幸せそうな顔をするからね。でも、食べ過ぎはもちろんよくないから、ある程度制限はしなきゃいけないことはわかっているよ。

TEXT BY 猿渡由紀

バートン×デップ＋エルフマン　三位一体の奇跡的ファンタジイ

渡辺麻紀（映画ライター）

「ジョニーは作品ごとに、いつも違う顔を見せてくれる。そういうところが大好きなんだ」とはティム・バートンのジョニー・デップ評。一方、ジョニーは「ティムは類い稀なアーティスト。そんな彼と仕事が出来るのは名誉なこと」「彼と一緒の仕事はとても楽しくて、まるで懐かしい我が家に帰って来たような気分を味わえる」といって、ティムへの愛をはばからない。

『シザーハンズ』から始まり『エド・ウッド』『スリーピー・ホロウ』と重ね、今や映画界のゴールデン・コンビとなったティム＆ジョニー。ふたりはコラボレーション作が発表されるたびに前述の言葉を口にする。だが、『スリーピー・ホロウ』以来6年ぶりになるこの『チャーリーとチョコレート工場』ほど、その言葉と作品が一致した作品も初めてなのではないか。ここでジョニーは「いつものように違う顔を見せ」、ティムは「類い稀なアーティストとしての才能を発揮」する。そして、これが本作のポイントでもあるのだが、ふたりして「アットホームなムードを満喫している」のが伝わってくるのだ。しかも、世界中にファンがいるロアルド・ダールのロングセラー児童書「チョコレート工場の秘密」という既製の題材で！　その原作を（ほぼ）忠実に映画化しながら！

実はもっとも驚かされるのはこの点。誰もが知っているストーリーを（ほぼ）忠実にスクリーンに再現しつつも、まるでこれがオリジナル作品のような個性と<らしさ>を発揮しているのだ。それものびのびと、自由自在に。昨今のハリウッドの主流であるベストセラーもの＆リメイクものに属しながら、ほかとは一線を画する作品になっているのはそのためだ。

そんな独特の個性とオリジナリティは、たとえばジョニーの役作りからもよくわかる。チョコレート工場のオーナーで世界一のショコラティエ、主人公のウィリー・ウォンカさんに扮したジョニーのルックはおかっぱヘアに白塗りフェイス、シルクハットにフロックコート。口元は何と入れ歯（のつもりだと思う。チョコの食べ過ぎで、という設定にしたかった？）である。この外見も相当に時代遅れかつユニークだが、それに加えてキャラクターの変人奇人度も俄然アップしている。その子供嫌いな態度＆子供のような態度が如実に現れているのは、選ばれし5人の子供たちを工場に招き入れるときに見せるセルロイドの人形たちのカーニバル。ダニー・エルフマンの耳に残る音楽に乗ってくるくる回る人形たちは、いつしか炎に包まれて焼け爛れていく。その様子を大ぶりのサングラスをかけ「ワオ！」と歓声をあげながら子供たちに混じって見物するジョニーのウォンカさん‥‥それはこの映画が原作以上に皮肉がきき、もっと大人っぽくビザールになっていることを示した一瞬。そしてティム・ファンなら、彼の長編デビュー作『ピーウィーの大冒険』を思い出させるシーンでもある。そう、ジョニー・ウォンカの、子供っぽいのに残酷で皮肉屋な性格はピーウィー・ハーマンと見事に重なってしまうのだ。さすがジョニー、ティム好みの役作りはパーフェクト。いや、と言うよりここは、ふたりの呼吸のなせるわざと言ったほうがいいだろう。

さて、そこで最近のティム作品である。彼は作品を作れば作るほど洗練を身に付けてきた監督といえるのだが、それは裏を返すと<らしさ>が薄れていくという危険性もはらんでいる。たとえば最近作の『ビッグ・フィッシュ』はその洗練を見せた代わりに<らしさ>が薄れたことが露な、ティムのディープなファンからするとちょっと物足りない映画でもあった。ところがこの『チョコレート工場』にはティムが初心に戻ったかのような空気に満ちている。つまり、ビザール感、オフビート感、ツクリモノ感が溢れんばかり！　カラフルな映像、カラクリいっぱいの楽しいセット、スポイルされた子供たちに向けられるいぢわるな視線。耳に残り、目を釘付けにするウンパ・ルンパ族の歌と踊り。そしてそれらすべてが相まって生まれる最高に楽しい世界。この辺からはティムの初期作品『ビートルジュース』的テイストを感じることが出来る。ジョニーの「我が家に帰ってきた味わい」とは、きっとこの感覚にちがいない。私たちが抱く、かつてのティムに会えたような懐かしさが、その感覚を証明しているのだ。

『ピーウィー』も『ビートルジュース』も、ティムがジョニーと出会うまえの作品だが、本作を見る限りではジョニーはピーウィーにもビートルジュースにもなれる資質をもっていることがよーくわかる。そもそも女性ファンのハートをつかみ本格的にブレイクしたのが『パイレーツ・オブ・カリビアン／呪われた海賊たち』のロックミュージシャンのごとき濃い海賊役なのだから、そのほかのハンサム・スターとはワケがちがうのだ。だからこそ彼はティムのお気に入りなのである。

もうひとつ、触れておきたいのがもうひとりの盟友ダニー・エルフマンの音楽。エルフマンは今回、子供たちが消えるたびにまったく異なる音楽を流してみせる。ロック調、ファンク調、フォークソング調‥‥まるでちがうメロディラインを生み出し、この映画の個性と楽しさをより強めているのだ。映画が終わり劇場を出るときには、<ウィリー・ウォンカさんの歌>を口ずさんでいる人は多いのでは？

このハッピー感は、ティム＆ジョニーだけでなく、もうひとりの盟友エルフマンが加わって生まれたもの。これぞまさに三位一体の奇跡的ファンタジイ。映画を見てこれほど幸せなキモチになれる作品も滅多にないのだから！

FREDDIE HIGHMORE Charlie Bucket

Profile

フレディー・ハイモア（チャーリー・バケット）

1992年生まれ。『Women Talking Dirty』(99)でヘレナ・ボナム＝カーターの息子役を演じて映画デビュー。最近では、マーク・フォースター監督の『ネバーランド』(04)でジョニー・デップ、ケイト・ウィンスレット、ダスティン・ホフマンと共演、ジャン＝ジャック・アノー監督の『トゥー・ブラザーズ』(04)でトラと心の交流をもつ少年を熱演、ファミリー・アドベンチャー『Five Children and It』(04)ではケネス・ブラナーと共演した。テレビ出演も数多く、イギリスでは「Happy Birthday Shakespeare」(00)、ミニ・シリーズ「I Saw You」(02)、アメリカでは「ビーンストーク ジャックとマメの木」(01)、ターナー・ネットワークのミニ・シリーズ「アヴァロンの霧」(01)などに出演。本作の後は、リュック・ベッソンが自著を映画化する『Arthur and the Minimoys』で祖父の家を守るために頑張る主人公アーサーを演じ、続く『August Rush』で音楽の才能に恵まれた孤児役でロビン・ウィリアムズやリブ・タイラーと共演する予定である。

Interview with FREDDIE HIGHMORE

フレディー・ハイモア インタビュー

チャーリーは足が早いわけでも、特別のことができるわけでもない。だからみんな共感がもてるんだ。

――ロアルド・ダールの原作を読んだことはありますか？

初めて読んだのは、この映画の話が来る4年くらい前だったと思う。吸い込まれていくみたいに夢中になったのを覚えているよ。チャーリーはほかの子よりも足が早いわけでもないし、特別のことができるわけでもない、普通の男の子。だから、みんな共感がもてるんじゃないかな。僕もそうだけど。

――この役は、どうやって獲得したんですか？ キャスティングの段階では、バートン監督はあなたが出演した『ネバーランド』を観ていなかったそうですが。

『ネバーランド』は撮影から公開までに、すごく時間がかかったからね。この役のためには、オーディションを受けに行ったんだ。合格の知らせがきた時、僕は家族といっしょにグランドキャニオンで夕日を見ていたよ。

――『ネバーランド』と2作続けてジョニー・デップと共演することになったわけですね。あなたにとって、ジョニーはどんな人ですか？

彼は最高だよ！ 『ネバーランド』の撮影の最終日、これでもうジョニーに会えないのかと思うと、すごく悲しかった。でも、またこんなふうに再会することができて、うれしかったな。もうお互いのことをよく知っているから、今回は前よりもさらにスムーズに仕事に入っていくことができた。

――他の子役とは、うまくいきましたか？

うん、みんな仲良くなったよ。今回は子供がたくさんセットにいたから、楽しかった。僕ひとりだけ子供だったとしたら、ちょっとさみしかったかもしれない。

――「天才子役」と呼ばれているあなたですが、演技をやりたいと思ったきっかけは何だったんですか？

よくわからない。テレビを少しやって、ヘレナ・ボナム＝カーターの息子を演じる映画の話がきて。そう、彼女の息子をやるのは、今回が2回目なんだ。演技がどうして好きなのかと聞かれても難しいけど、いろんな人たちに会えるのは楽しいな。ジョニーやティムみたいな、すばらしい人たちにも、映画のおかげで出会うことができたわけだし。

――チョコレートは好きですか？

大好きだよ。ミルクチョコレートも、ダークチョコレートも、全部好き。チャーリーは誕生日にしかチョコレートを食べられないけど、僕はもっと食べているよ（笑）。

TEXT BY 猿渡由紀

JULIA WINTER
Veruca Salt

ジュリア·ウィンター
(ベルーカ·ソルト)

1993年生まれのロンドンっ子。児童劇団オールソーツの一員。本作でプロとしての俳優デビューを果たした。

「床に寝転がってリスともがき合うなんて、どうすればいいか分からなかったの。そしたら、ティムが隣に寝転がってやってみせてくれたのよ」とウィンター。「ティムと私は脚をバタバタさせ、頭のてっぺんからわめきながら、想像上のリスを追い払ってたの。最高に楽しかったけど、きっとふたりともすごくバカみたいに見えたでしょうね」

ANNASOPHIA ROBB
Violet Beauregarde

アナソフィア·ロブ
(バイオレット·ボーレガード)

1993年コロラド州デンバー出身。クリスティー·エッカーの『Daddy's Day』のアニー役で映画デビューを飾った。最近では、テレビ映画「Samantha: An American Girl Holiday」(04)に主演するとともに、ウェイン·ワン監督の新作『Because of Winn-Dixie』(05)でジェフ·ダニエルズと共演している。また、ニッケルオデオンの「Drake and Josh」(04)にもゲスト出演した。

ロブは本作での経験について、「これはみんなからとても愛されてる物語だから、歴史の小さな一部になった気がするわ」と語る。「セットにいることも、まるで夢のようだった。お菓子でいっぱいの部屋の中で遊んだり食べたりできるんだもの。すっごく楽しかったわ」

JORDAN FRY
Mike Teavee

ジョーダン·フライ
(マイク·ティービー)

13歳のフライは『Don't Cry For Me』(03)でアラン·アーキンと共演。本作が初のメジャー映画出演作。

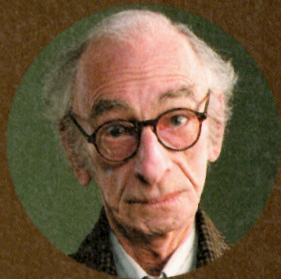
新人俳優のフライは撮影のため、ワイヤーで吊るされてセットの中を飛ばされて大喜び。スタント·コーディネーターのジム·ダウダールはこう明言する。「一番難しかったのは心から楽しんでる彼を笑わせないことだった。あの場面では、彼はむしろ脅えて、ナーバスになっているはずだったからね」

PHILIP WIEGRATZ
Augustus Gloop

フィリップ·ウィーグラッツ
(オーガスタス·グループ)

グループを演じるのは、これがプロの俳優としてデビューとなったドイツ人フィリップ·ウィーグラッツ。

彼は食いしん坊役のために体に合わせて作られたボディー·スーツとふくらはぎを身にまとった。それよりも大変だったのは水泳だ。最初泳げなかった彼も、ウェットスーツを着たスタッフから泳ぎのレッスンを受け、ボディー·スーツを着たままチョコレートの川を流れていく演技を乗り越えた。泳ぎはマスターしたものの、耳に入ってくるチョコレートには苦しめられた。

DAVID KELLY
Grandpa Joe

デイビッド・ケリー
(ジョーおじいちゃん)

1929年アイルランド、ダブリン出身。ダブリンの名門アビー・シアター・スクールで学び、長年にわたり舞台、テレビ、映画で数えきれないほどの作品に出演し、愛されてきた。2003年、アイルランド演劇界への貢献を称えられ、アイリッシュ・タイムズ紙からライフタイム・アチーブメント賞を授与された。98年のカーク・ジョーンズ監督作『ウェイクアップ!ネッド』ではマイケル・オサリバン役で絶妙な味を出し、ゴールデン・サテライト賞とスクリーン・アクターズ・ギルド賞の候補となった。その他の主な映画出演作は、ロマン・ポランスキー監督の『ポランスキーのパイレーツ』(86)、マイク・ニューウェル監督の『白馬の伝説』(92)、『グリーンフィンガーズ』(00)、サディウス・オサリヴァン監督の『私が愛したギャングスター』(00)、『ミーン・マシーン』(01)など。

HELENA BONHAM CARTER
Mrs. Bucket

ヘレナ・ボナム=カーター
(バケット夫人)

イギリス出身。デヴィッド・フィンチャー監督の衝撃作『ファイト・クラブ』(99)から、ティム・バートン監督作『PLANET OF THE APES/猿の惑星』(01)、『ビッグ・フィッシュ』(03)に至るまで、幅広いジャンルの作品で才能を発揮している。『鳩の翼』(97)では、アカデミー賞最優秀主演女優賞、ゴールデン・グローブ賞、全米俳優組合賞にノミネート。さらに『死の愛撫』(95)ではカナディアン・ジニー賞最優秀女優賞を受賞、「エクスカリバー　聖剣伝説」(98)ではエミー賞候補となった。トレヴァー・ナン監督の『レディ・ジェーン/愛と運命のふたり』(86)で映画デビュー。続いてジェームズ・アイヴォリー監督の『眺めのいい部屋』(86)に主演し、同監督作の『モーリス』(87)、『天使も許さぬ恋ゆえに』(91)、再びJ・アイヴォリー監督の『ハワーズ・エンド』(92)に出演。その他、『ハムレット』(90)、『フランケンシュタイン』(94)、ウディ・アレン監督の『誘惑のアフロディーテ』(95)などにも出演している。次回作はT・バートン監督のストップモーション・アニメ『ティム・バートンのコープス ブライド』(05・声の出演)。

NOAH TAYLOR
Mr. Bucket

ノア・テイラー
(バケット氏)

数多くの作品に出演しているオーストラリアきっての俳優。『君といた丘』(87)とその続編『ニコール・キッドマンの恋愛天国』(91)の主人公役で知られている。その他の映画出演作には、スコット・ヒックス監督の『シャイン』(96)、キャメロン・クロウ監督の『あの頃ペニー・レインと』(00)と『バニラ・スカイ』(01)、『トゥームレイダー』(01)、『アドルフの画集』(02)、『トゥームレイダー2』(03)、ウェス・アンダーソン監督の『ライフ・アクアティック』(04)などがあり、テレンス・マリック監督の『The New World』(05)が控えている。

JAMES FOX
Mr. Salt

ジェームズ・フォックス
(ソルト氏)

1939年ロンドン出身。子役として、『ミニヴァー夫人』(42)の続編『The Miniver Story』(50)で映画デビュー。60年代初めまでには子役から脱皮し、『長距離走者の孤独』(62)や『召使』(63)などで大人の役を演じるようになった。その後『モダン・ミリー』(66)、『逃亡地帯』(66)などの名作に出演し、『素晴らしきヒコーキ野郎』(65)やニコラス・ローグ監督のカルト作『パフォーマンス』(70)でも主演した。9年間の活動休止期間後、デヴィッド・リーン監督の『インドへの道』(84)、『ビギナーズ』(86)、『パトリオット・ゲーム』(92)、『日の名残り』(93)などに出演した。最近作は、『恋するための3つのルール』(99)、ジェームズ・アイヴォリー監督の『金色の嘘』(00)、『プリティ・ガール』(04)など。

MISSI PYLE
Mrs. Beauregarde

ミッシー・パイル
（ボーレガード夫人）

1972年テキサス州ヒューストン生まれ。ロサンゼルスに移った後、『恋愛小説家』(97)などの映画で起用されるようになる。99年、『ギャラクシー・クエスト』での陽気なエイリアン、ラリアリ役で一躍注目を集め、2001年に『プッシーキャッツ』で悪役アレキサンドラ役を獲得した。最近では、ティム・バートン監督の『ビッグ・フィッシュ』(03)、『ポリー my love』(04)、『50回目のファースト・キス』(04)、『ドッジボール』(04)などに出演。女性だけのコメディー寸劇集団"ビッチズ・ファニー"のメンバーで、定期的にスタンダップ・コメディーも披露している。

ADAM GODLEY
Mr. Teavee

アダム・ゴドリー
（ティービー氏）

1964年イギリス、アマーシャム出身。最近ではリチャード・カーティス監督の『ラブ・アクチュアリー』(03)に出演し、フランク・コラチ監督の『80デイズ』(04)でジャッキー・チェンと共演した。その他の映画出演作には、『And Now…Ladies and Gentleman』(02)、『サンダーパンツ！』(02)、『Nanny McPhee』(05)など。テレビや舞台でも活躍している。

DEEP ROY
Oompa-Loompa

ディープ・ロイ
（ウンパ・ルンパ）

本作で『PLANET OF THE APES／猿の惑星』(01)、『ビッグ・フィッシュ』(03)に続いて3作目のティム・バートン監督作出演となった。その他の映画出演作は、『ピンク・パンサー3』(76)、『スター・ウォーズ　帝国の逆襲』(80)、『ダーク・クリスタル』(82)、『スター・ウォーズ　ジェダイの復讐』(83)、『ネバーエンディング・ストーリー』(84)、『グリンチ』(00)、『ホーンテッドマンション』(03)など。また、スタントとしても数多くの作品に出演しており、『ポルターガイスト2』(86)、『フック』(91)、『ジャングル・ブック』(94)、『ヴァン・ヘルシング』(04)などがある。

CHRISTOPHER LEE
Dr. Wonka

クリストファー・リー
（ドクター・ウォンカ）

これまでに250作以上の映画やテレビ作品に出演。有名な作品には、『吸血鬼ドラキュラ』(58)、『四銃士』(74)、『007／黄金銃を持つ男』(74)（原作者イアン・フレミングは従兄弟にあたる）などがある。最近では、ピーター・ジャクソン監督の『ロード・オブ・ザ・リング』1、2作目(01、02)やジョージ・ルーカス監督の『スター・ウォーズ エピソード2／クローンの攻撃』(02)、『スター・ウォーズ　エピソード3／シスの復讐』(05)に出演。ティム・バートン作品では『スリーピー・ホロウ』(99)と次回作『ティム・バートンのコープスブライド』(05・声の出演)にも出演している。世界で最も多くの映画に出演した俳優としてギネスブックに登録されており、その功績と映画産業への貢献を称えられ、ロンドン映画批評家協会ディリス・パウエル'94賞を授与された。最近ではイギリス女王陛下の誕生日の受勲者リストに選出され、英帝国騎士団長の称号を授与されている。

ショコラティエ　高木康政　インタビュー

家族があってこそ、甘い人生なんですよ。

『チャーリーとチョコレート工場』とは言っても、チョコはアシストで、実際は人間の心を描いている。だからいろんな性格の子を5人選んで。現代の問題をとらえてると思うし、家族を大事にするというのは、すごく的を射ていますね。僕らの仕事でも、家族より仕事第一の人は離婚している。でも家庭を壊したら、本当においしいものを作ることは出来ないんですよ。僕らの仕事は、幸せを配達することなんですから。

フランス語で仕事を意味する「トラヴァイエ(travailler)」という言葉は、ギリシャ語から来ているらしくて、元々は罪という意味。だからフランス人は人生を楽しむために働くんです。毎年のバカンスを楽しむために働こうという意識。そして、どうせ働くなら好きなことをやろうと、小学校からそういう教育をしてるんです。フランスだけでなく、ベルギーもドイツもそう。フランスにはお菓子屋さんが目標とするMOF(最優秀職人)という称号があるんですが、そういう人でも家族が第一で、第二が仕事なんですよ。でも日本に帰ってきたら、僕より年上の人は一に仕事、第二に家族という考えで、それは違うなと思って。貧乏でもいいからあったかい家族がないと、いい仕事はできない。ウォンカが商品の発想に「自信が持てない」と言ったら、チャーリーがお父さんに会いに行かせたけど、まさしくそう。僕もカミさんと喧嘩すると、やっぱり集中できないんだよね(笑)。

僕が仕事場でよく言うのは「こだわりと発想」。こだわりはいい素材を探し出し、リーズナブルな値段で商品化することで、お客さんが喜ぶ。それが第一。発想はいろんなところで出てくるけど、やっぱり家族がちゃんとしていないと。この映画と一緒だよね。だから店では、よいパティシエやパティシエールになる前に、よい人格者になれと言っています。「買ってみたい」「食べてみたい」と思ってもらうには、人に伝えられる何かがないと。

歯医者のお父さんの家に行くと、壁に新聞が貼ってあったでしょ？　あそこは、うちの親父と重なって、ぐっと来ましたね。僕も高校生のとき、菓子職人になりたいと言ったら随分反対されたんですよ。でも、うちの親父も僕がヨーロッパで優勝した記事とか、全部取ってあってね。親のありがたみは25、6歳になってようやくわかるし、家族の大切さは、子供ができると余計に感じる。それがこの映画の中にきちんと打ち出されていて。それでこそ甘い人生なわけでね。

子供たちに「そういう子はダメなんだよ」と言いながら、ウォンカ自身にもダメなところがあった。家族を大事にしていなかった、というのに気がつく。でも、そういうテーマだけど、間にギャグがあるのがいいよね。監督の独特のユーモアがよく出ていて。ウォンカが小さい時に、家に帰ってきたら、本当に家がないのはいい(笑)。楽しいよね。

チャーリーが大好きなウォンカの板チョコは、僕が作るとしたら、やっぱりミルクチョコレ

ートかな。子供もおいしいと思う、甘めのもの。でも、僕が今実際にやろうとしているのは、30代をターゲットにしたビター系。フランスでは板チョコにカカオが何パーセント入ってるか、大きく表示してあって、スーパーに行くと、カカオが70％以上入ってる苦めの本物のチョコレートと、日本でも売っているような甘いチョコ菓子と両方あるのね。両方の味を知ることが大切で、そうして自然と味覚が強化されていく。僕だって、たまにはコンビニのお菓子を食べますから（笑）。

チョコレートには、魔力がありますよね。よく高級ホテルに行くとベッドサイドにチョコが置いてあるのは、あれを食べてホッとして熟睡しましょうというもの。安堵感が得られる。チョコレートは1日に200g以下なら食べても太らないんだよ。ビターの場合だけど。ポリフェノールも入ってるし。できればカカオが70％以上がいいんだけど、日本ではほとんどが苦いって言われちゃう。そのためにも僕はいろんなところで「もっとカカオのよさを知ってよ」とやってるの。NHKの「音楽夢くらぶ」という番組では、ゲストにお菓子を作って出しているんですが、チョコを食べると普通では見られない、ホッとした顔が見られる。ほんと魔力だよ。昔は薬だったし。アステカ王朝時代からあって、500年ぐらい前にコロンブスがヨーロッパに持ってきて、イタリアからフランスに行って。それを甘くしたのがイギリス人らしい。それまで飲み物だったチョコレートを、初めて固めたのもイギリス人。そして、ミルクチョコレートを作ったのはスイス人。それがアンリ・ネスレさん。粉ミルクを発明した人で、粉ミルクを板チョコに混ぜる技術も開発して。だから今でもスイスのチョコがおいしいと言われるのには理由があるのね。あそこから世界にチョコを輸出していたから、いいカカオが集まるんです。僕も今、キットカットの開発に関わっていますが、最初は大手だからと断ってたんだけど、ネスレならと思って。欧米では、ここが本当にウォンカ・チョコを作って売ってるんですよ。

ウォンカが、材料を求めて探検する気持ちもよくわかりますね。僕もいろいろ捜し歩きました。お菓子作りのアイデアは、旅行先の景色からインスピレーションを得たり、おいしい素材に出会ったことから生まれたり、両方ですね。たとえばハチミツは、イタリアのトリノまで行く。おいしいし、小さな養蜂場で家族経営でほのぼのやっているのがいい。そうやって捜し歩くうちに、ウンパ・ルンパに出会えるかもしれない（笑）。ウォンカと彼らとの出会いとか、ちょっとしたところにこだわりが垣間見える。でもこだわりだけじゃダメで、愛がなければとも言っている。その愛を育むのは家族からということを描いた、いい映画ですね。（談）

高木康政　1966年生まれ。2度の渡欧で日仏の有名店で修行後、欧州で最も権威あるコンクールで優勝。帰国後「レ・サヴール」のパティスリーシェフに就任。現在は都内で「ル パティシエ タカギ」「ル ショコラティエ タカギ」のオーナーパティシエとして活躍中。（社）東京洋菓子協会理事。

（インタビュー・採録／石津文子）

ロアルド・ダールを翻訳する訳者冥利

原作翻訳者　柳瀬尚紀（英文学者、翻訳家）

この映画『チャーリーとチョコレート工場』には、とても感心した。非常にていねいに作られている。

正直なところ、コンピュータ・グラフィックスとか特撮とかに頼って、安っぽい薄っぺらなシーンが続くのではないかという心配が、少なからずあった。ぜんぜんそうではない。ワンカさんは、滝で混ぜあわせるチョコレートの舌もとろけるまろやかな味を自慢するけれど、この映画の味も、実にとろりとしてきめ細やかだ。

なにしろ、それぞれの役者の味がいい。子供も巧いし、ジョゼフィーンばあちゃんやジョージナばあちゃんのように台詞もほとんどない脇役も旨い、いや、巧い。ウンパッパ・ルンパッパ人たちをディープ・ロイがひとりで踊りまくるという演出——ひとりでいったい何種類の踊りを踊ったろうか——しかも精神科医まで演じる——これまた旨かった、いや、巧かった。

そしてリスたちの名演技！　これには動物好きとして、舌なめずりをした、いや、舌を巻いた。

ジョニー・デップから無名のリスにいたる役者たちの名演を観ながら、「チョコレート工場の秘密」の訳者としては、自分の翻訳の出来について考えていた。くりひろげられる映像の世界と、自分の本業である言葉の世界とを、ついつい比べていたのである。もっとも映像と言葉、スクリーンと活字とは別物であるから、たんに比べるというのは当っていないだろう。むしろ、こういったほうが当っている。つまり「チョコレート工場の秘密」の訳者として、言葉で数多くの仕掛けや技を活字にしたので、それと重ねあわせるようにして映画を観た。そして、自分の言葉の作業と重ねあわせつつ楽しく観た。

その言葉について、映画でうなった台詞がひとつあったことを先にいっておこう。

ジョウじいちゃんが、

《Holy buckets!》

といって、口あんぐり驚くひとこま。

英和辞典のHolyの項目を、ぜひ見ていただきたい。

Holy cats [cow, gee, mackerel, Moses, smoke(s)]

などが収録されているはずだ。Holyの次に猫や雌牛や鯖やモーセや煙などがくると、驚きを表す表現になるのだ。この脚本家はHolyの次にバケツをもってきた。これが実に滑稽で、気が利いている。ロアルド・ダールの原作にはない。ダールも一本取られたといえよう。

「チョコレート工場の秘密」の訳者あとがきで記したように、チャーリー君の苗字Bucketは、バケツである。ダールは実在しない名前をこしらえるのが好きで、この苗字もそれ。「D is for Dahl」という本がある。来年、拙訳が刊行予定で（邦題は未定）、なかなか面白いダール小辞典。この本にもわざわざBucketバケツの項目があり、この苗字に読者の注意をうながしている。チャーリー君の苗字がバケツだからこそ《Holy buckets!》という台詞が生きている。原文になかったのが、訳者にとっては幸いといえば幸い。さて、なんと訳そうか…。いま、ただちには思いつかない。

なお、チャーリー君の家にバケツがちゃんと小道具として登場しているのも、お見逃しなく。

さて、映画『チャーリーとチョコレート工場』と原作「チョコレート工場の秘密」とは、さまざまに違っている。どういうふうに違っているかは、これから原作を読む人の興味をそぐので、語らないでおく。（映画と文学作品との違いの最も有名な例は、映画『マイ・フェア・レディ』（64）と原作ジョージ・バーナード・ショオ「ピグマリオン」との違いだろう。原作のヒギンズ

先生は、映画のハッピーエンドと違って、イライザにふられる。映画で有名になったアスコット競馬場は、原作に登場しない）

ただひとついっておきたいのは、要するに「チョコレート工場の秘密」という原作が、たまらなく面白いということだ。その面白さとは、言葉の面白さである。読者カードが数多く届いているが、小学校5年生からこんなすばらしいのが来た。

《この本は、とても、印象に残る、言葉ばかりがのっています。とても、おもしろくて、つい夢中に、読んでしまいます。この本を、読んでいる時は、時間なんて、なく、思えます。》

小学校5年生!!!!! ――びっくりマークを5つは付けたい。

びっくりマークといえば、《10代後半に英語の授業で》ダールを読んだという女性から――《20才の娘がこの本を購入して、なつかしく読んで、びっくり!! ウルトラ訳です!!! 「空想講演」という後書きを読んで"この人、Dahlになった"と直感です。Dahlは、よみがえりました。》

実際、しばしばダールになったような調子で翻訳をしていたという自負はある。「チョコレート工場の秘密」の続編、「ガラスの大エレベーター」から、そんな実物を引こう。

おばあちゃんの留守に下剤を1瓶飲んでしまった女の子のエピソードがあり、それだけでも面白い話だが、原文では2行ずつ韻を踏んだ戯れ歌で書かれているから、いっそう面白い。100行以上の長い詩を、こんな調子で訳した。

「大事な下剤をなんてこった」
「おなか痛い」と言ったこの子にばあちゃん怒った
「あったりまえの話でしょ
わたしの薬を食べたでしょ」
言うなりばあちゃん受話器を捥いで
そしてどなった「早く！ 急いで！
救急車！ 子供が病気！
あたしゃちゃんと正気も正気！」

映画『チャーリーとチョコレート工場』に出演した役者たち、ジョニー・デップから無名のリスにいたる役者たちは、皆、役者冥利をたっぷりと味わったことだろう。「チョコレート工場の秘密」の訳者もまた、「チョコレート工場の秘密」「ガラスの大エレベーター」「アッホ夫婦」…と訳しながら、訳者冥利にひたっている。

※ 登場人物の名称は、原作「チョコレート工場の秘密」（柳瀬尚紀訳）の表記に準じております。

ロアルド・ダール（原作） ROALD DAHL Book Author

1916～90年。イギリス、南ウェールズ生まれ。第二次世界大戦中、英国空軍パイロットとして従軍後、その経験をもとに執筆活動を開始。短編小説で人気を確立し、結婚後は児童小説も書き始めた。本作以外にも「おばけ桃の冒険」（61）、「マチルダはちいさな大天才」（88）などの作品で、世界中で愛され続けている。チョコレートが大好きで、著作の中でどの学校にも"チョコレートの先生"をおくべきだと提唱した。

「チョコレート工場の秘密」
クェンティン・ブレイク絵／柳瀬尚紀訳
定価：1260円（税込）／評論社刊

ブラッド・グレイ(製作) BRAD GREY Producer
映画・テレビの製作、タレントマネージャーとして、映画業界において最も成功を収めている。2005年にパラマウント・モーション・ピクチャーズグループのヴァイアコム社の会長兼CEOに就任。製作待機作には、香港映画『インファナル・アフェア』(02)のリメイクで、マーティン・スコセッシ監督の『The Departed』(06公開予定)がある。TVシリーズ「ザ・ソプラノズ/哀愁のマフィア」(99〜)の製作総指揮としてエミー賞とゴールデン・グローブ賞を受賞した他、エミー賞のノミネートは合計17回に及ぶ。

リチャード・D・ザナック(製作) RICHARD D. ZANUCK Producer
27歳で20世紀フォックスの製作部門担当の社長に任命され、ハリウッド史上最も若い企業トップとなり、1971年、デイビッド・ブラウンと共に映画史上最も成功を収めた独立系製作会社となるザナック/ブラウン社を設立。15年以上にわたり、次々と大ヒット作、アカデミー賞受賞作やノミネート作を生み出した。その主な作品は『スティング』(73)、『JAWS/ジョーズ』(75)など。88年にはザナック・カンパニーを設立し、第1作目『ドライビング Miss デイジー』(89)はアカデミー賞9部門にノミネート、作品賞を含む4部門を受賞した。その他、クリント・イーストウッドと組んだ『トゥルー・クライム』(99)、ティム・バートン監督の『PLANET OF THE APES/猿の惑星』(01)と『ビッグ・フィッシュ』(03)、トム・ハンクス主演の『ロード・トゥ・パーディション』(02)などがある。

パトリック・マコーミック(製作総指揮) PATRICK McCORMICK Executive Producer
数多くの一流俳優、フィルムメーカーたちと、幅広いジャンルの作品を製作してきた。最近作は、『ピーター・パン』(03)、『バンディッツ』(01)。その他に製作総指揮を担当した作品は『ボーイズ・オン・ザ・サイド』(95)、『陪審員』(96)、『フェイク』(97)、『グッドナイト・ムーン』(98)など。

フェリシティー・ダール(製作総指揮) FELICITY DAHL Executive Producer
1983年にロアルド・ダールと結婚。ダールが40年間にわたって創作活動をおこなったバッキンガムシャーのグレート・ミッセンデン村に現在も住み、ロアルド・ダールの文芸作品を取り扱うダール&ダール社の会長を務めている。90年のダールの死去後はロアルド・ダール基金を設立、その会長も務めており、イギリスを拠点に幅広いチャリティ活動や、識字教育、神経学、血液学の分野で子供たちへの救済活動をおこなっている。さらに、ダールの作品を基にしたクラシック音楽を紹介する音楽ライブラリーを創設し、子供たちにコンサートホールへ足を運ぶ機会を提供している。これらの公演や宣伝活動から得られた資金はすべて基金へ寄付されている。
最近では、グレート・ミッセンデン村に今年6月に開館したロアルド・ダール博物館の設立に情熱を注いできた。

マイケル・シーゲル(製作総指揮) MICHAEL SIEGEL Executive Producer
マイケル・シーゲル&アソシエイツ社の代表取締役。同社は優れた文学作品の映画化を中心とした著作権の管理、運営をおこなっている。ダールの死去した1990年以降、ダールの作品の著作権を管理しており、『チャーリーとチョコレート工場』の他、ダールの作品の映画化に力を注いできた。

グレイアム・バーク(製作総指揮) GRAHAM BURKE Executive Producer
エンターテインメント界およびメディア産業における経験を活かし、ビレッジ・ロードショー・ピクチャーズのリーダーのひとりとして活躍している。1968年にロードショー・ディストリビューター社を設立。オーストラリア・フィルム・コミッション初代理事を経て、ビレッジ・ロードショー・リミテッドの重役を務めており、現在は同社のマネージング・ディレクター、エグゼクティブ・ディレクターでもある。

ブルース・バーマン(製作総指揮) BRUCE BERMAN Executive Producer
1984年にワーナー・ブラザース映画に参加、91年から96年まで映画製作担当社長を務めた。バーマンの指揮のもとで製作・配給された作品には、『ドライビング Miss デイジー』(89)、『グッドフェローズ』(90)、『JFK』(91)、『ボディガード』(92)、『逃亡者』(93)、『依頼人』(94)、『ツイスター』(96)などがある。98年にビレッジ・ロードショー・ピクチャーズの会長兼CEOに任命され、2007年までワーナー・ブラザース映画の共同事業パートナーとして60本の劇場映画を製作する予定。製作作品は、『マトリックス』(99)、『トレーニング デイ』(01)、『オーシャンズ11』(01)、『ミスティック・リバー』(03)など。

ジョン・オーガスト(脚本) JOHN AUGUST Screenplay

サンダンス映画祭で上映された『go』(99)の脚本と共同製作を手がけ、『タイタンA.E.』(00)、『チャーリーズ・エンジェル』(00)、『チャーリーズ・エンジェル／フルスロットル』(03)にもクレジットされている。ダニエル・ウォレスの小説を映画化した『ビッグ・フィッシュ』(03)で、英国アカデミー賞最優秀脚色賞、放送映画批評家協会賞の候補となった。この作品でティム・バートンと仕事をしたことを機に、本作にも参加することとなった。待機作品は「ターザン」を映画化した『Tarzan』、T・バートン監督の『ティム・バートンのコープス ブライド』(05)。

PHILIPPE ROUSSELOT, A.F.C./A.S.C. Director of Photography
フィリップ・ルースロ, A.F.C./A.S.C.(撮影)

フランス出身。『戦場の小さな天使たち』(87)と『ヘンリー&ジューン／私が愛した男と女』(90)でアカデミー賞候補となり、ロバート・レッドフォード監督の『リバー・ランズ・スルー・イット』(92)で受賞を果たした。その他に、『ディーバ』(81)、『インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア』(94)、デンゼル・ワシントンの監督デビュー作『きみの帰る場所／アントワン・フィッシャー』(02)、『タイタンズを忘れない』(00)、『コンスタンティン』(05)など。『PLANET OF THE APES／猿の惑星』(01)、批評家から高い評価を受けた『ビッグ・フィッシュ』(03)に続いてティム・バートン監督と組むのは3度目。

アレックス・マクダウェル(美術) ALEX McDOWELL Production Designer

デジタル技術を伝統的な映画美術と融合させ、独特のプロダクション・デザインのプロセスを作り出している。『ファイト・クラブ』(99)で、デジタル技術をデザイン・プロセスに組み込み始め、スティーヴン・スピルバーグ監督の『マイノリティ・リポート』(02)ではデジタル・デザイン班と協力してそのプロセスを発展させ、説得力のある未来世界を作り出した。同じくS・スピルバーグの『ターミナル』(04)では、史上最大の映画用建築セットとなった実物大の空港ターミナルを建設。ティム・バートンのストップモーション・アニメ『ティム・バートンのコープス ブライド』(05)のミニチュア・セットもデザインしている。

Staff Profiles

ガブリエラ・ペスクッチ(衣装デザイン) GABRIELLA PESCUCCI Costume Designer

映画、テレビ、オペラ、舞台と幅広いキャリアを誇るベテランデザイナー。マーティン・スコセッシ監督の『エイジ・オブ・イノセンス／汚れなき情事』(93)でアカデミー賞衣装デザイン賞を受賞、テリー・ギリアム監督の『バロン』(88)でも同賞の候補となった。最近では『真夏の夜の夢』(99)、『ヴァン・ヘルシング』(04)、待機作としてはテリー・ギリアム監督作『ブラザーズ・グリム』(05)の衣装デザインを手がけている。

クリス・レベンゾン, A.C.E.(編集) CHRIS LEBENZON, A.C.E. Editor

ティム・バートン監督とは『バットマン リターンズ』(92)、『ナイトメアー・ビフォア・クリスマス』(93)、『エド・ウッド』(94)、『マーズ・アタック!』(96)、『スリーピー・ホロウ』(99)、『PLANET OF THE APES／猿の惑星』(01)、『ビッグ・フィッシュ』(03)で仕事を重ねている。
プロデューサーのジェリー・ブラッカイマーとも数多く組んでおり、トニー・スコット監督の『トップガン』(86)や『デイズ・オブ・サンダー』(90)、『クリムゾン・タイド』(95)、『エネミー・オブ・アメリカ』(98)、マイケル・ベイ監督の『アルマゲドン』(98)と『パール・ハーバー』(01)などを手がけた。『クリムゾン・タイド』と『トップガン』で2度アカデミー賞候補となっている。

ダニー・エルフマン(音楽) DANNY ELFMAN Music

映画界で最も多芸な実力を備え、成功を収めている作曲家のひとり。これまでに『ピーウィーの大冒険』(85)、『ビートルジュース』(88)、グラミー賞候補となった『バットマン』(89)、『シザーハンズ』(90)、『バットマン リターンズ』(92)、『ナイトメアー・ビフォア・クリスマス』(93)、『マーズ・アタック!』(96)、『スリーピー・ホロウ』(99)、『PLANET OF THE APES／猿の惑星』(01)、アカデミー賞候補となった『ビッグ・フィッシュ』(03)など合計11本のティム・バートン作品の音楽を手がけている。
アカデミー賞受賞作『シカゴ』(02)のオリジナル音楽や『スパイダーマン』(02)、『スパイダーマン2』(04)の音楽も作曲している他、代表作には、アカデミー賞音楽賞候補となった『グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち』(97)、『メン・イン・ブラック』(97)、『誘う女』(95)、『ミッション:インポッシブル』(96)、『メン・イン・ブラック2』(02)などがある。

ロアルド・ダールの不朽の名作を映画化

1964年に出版された「チョコレート工場の秘密」は昨年、出版40周年を迎えた。現在も子供と大人の両方から愛されているこの物語は、全世界で32か国語に翻訳され、1,300万部以上販売されている。その絶えることのない人気は、作者がどれだけ子供たちのことを理解し、その本質をつかみ、そして彼らと心を通じ合わせることができたかを示している。

プロデューサーにとって、監督としてティム・バートンは理想的な選択だった。「最初に話し合ったときに、ティムがこの本のファンで、できるだけ原作に忠実でありたいと思っていることがはっきりした。それこそ、まさに私たちが思っていたことだった」と製作のブラッド・グレイは言う。「原作の興味深い点のひとつは、雰囲気や感情表現がとても鮮やかで、とても具体的であるにもかかわらず、なお、読む人が自由に解釈できる余地を残しているところなんだ」とバートンは考える。「読者が想像力をふくらませる余地があり、そこがロアルドの語り手としての強みだと僕は思う」

バートンは準備段階の初期にダール家を訪れ、ダールがそのすべての作品を執筆した離れの仕事部屋を見学した。「ロアルドと僕は絶対に同じものの感じ方をするということをそのとき強く感じた。僕が考えたチャーリーの家と、ロアルドの仕事部屋は不気味なほど似ていたんだ。僕は本人に会う機会は一度もなかったが、仕事を通じて、彼とは何かつながりを感じるよ」

バートンと脚本のジョン・オーガストは、原作にはないウォンカの子供時代を描き、町の歯医者だった厳格な父ドクター・ウォンカとの関係を付け加えた。バートンはこう説明する。「僕たちはウォンカがエキセントリックになった原因を映画で示そうと考えたんだ。彼が奇妙なのには理由があって、その裏にあるのは何かということをほのめかしたんだ」

ダールの世界の住人たちのキャスティング

ティム・バートンからウィリー・ウォンカの役をやらないかと聞かれて、言葉を失いそうになったというジョニー・デップ。「一緒に夕食をとっていたときに、彼が切り出したんだ。『チョコレート工場の秘密』を知ってるだろう？ってね。彼が『実はあの話を映画にしようと思ってて、君が演じてくれないかと思ってさ、それは…』と言い出すと、僕は彼が最後まで言い終わるのを待ち切れずに、『やるよ。もちろん。やる』と答えてた。考える必要もなかったね」

「ウィリー・ウォンカ役に選ばれたこと自体がとても栄誉なこと」ダールの長年のファンであるデップは言う。「しかも、ティムに選ばれたということでその栄誉が2倍、3倍になる。彼のビジョンはいつもすばらしく、どんな予想をも超えてしまう。彼がかかわっているというだけで、僕が出演を承諾するには十分なんだ。もしティムに、1個の電球を見つめる僕をフィルム540万メートル分撮影したいと言われれば、3か月間まばたきができなくても僕はやるね」

後継者を見つけるために、工場の門を開かざるを得なかったウォンカは、他の人間との接触に慣れておらず、居心地の悪い思いをする。その心境についてデップは「彼は人前では営業用の顔を取り繕うが、その仮面の下では、他の人間と実際につき合うことが不安で仕方がない。きっとバイ菌恐怖症で、だからいつも手袋をはめているんだと思う。実際にはしていないけど、マスクまでしているような雰囲気がある。工場見学のあいだ、ウォンカが演技をしているような瞬間がある。とても下手な演技で、カンペの棒読みみたいなんだ。彼はこの見学者たちと本当は一時も一緒に過ごしたくないんだよね。彼らを迎えた瞬間から、無理に笑顔を貼りつけて演技をしているんだと思う」

ウォンカの外見について、デップはいろいろ考えをめぐらせた。「ヘアスタイルはごく初期の段階ではっきり考えていた要素のひとつなんだ」と彼は言う。「前髪の短いおかっぱ頭で、かなりダサいんだけど、ウォンカ本人はカッコいいと思っているような感じ。というのも、彼はとても長いあいだ引きこもっていたから、他に知らないんだよ。彼が使う時代遅れのスラングと同じだね」

さらに、ウォンカの目がキラキラ輝いていると原作で描写されているので、デップは特徴的な色合いを出すために紫がかったコンタクト・レンズを着用。また、少年時代に歯列矯正を施されたということから、完璧な歯並びを見せるべきだと考え、長年、屋内で生活してきた設定のために肌の色を青白くした。こうして、非常にエキセントリックなウォンカのイメージが完成したのだった。

チャーリーを演じるのは、『ネバーランド』(04)に続いてデップとの共演になったフレディー・ハイモア。バートンは彼がいかに自然で、いかに本物の俳優であるかに感嘆する。「彼の演技には見せかけでない重みがあり、それは大人の俳優にとってもとても難しいことなんだ。セリフなしで、またそれほど熱演せずとも細やかな感情を表現することができる。その点がチャーリー役を選ぶうえで極めて重要だった」

工場見学に付き添うジョーおじいちゃんを演じるのは『ウェイクアップ！ ネッド』(98)のデイビッド・ケリー。「デイビッドが入ってきた瞬間に、決まりだ、と思ったよ」とバートンは思い返す。「彼はジョーおじいちゃんそのものだった。ほんとにすばらしい俳優で、あの表情豊かな顔つきはまるでサイレント映画のキャラクターみたいだ」

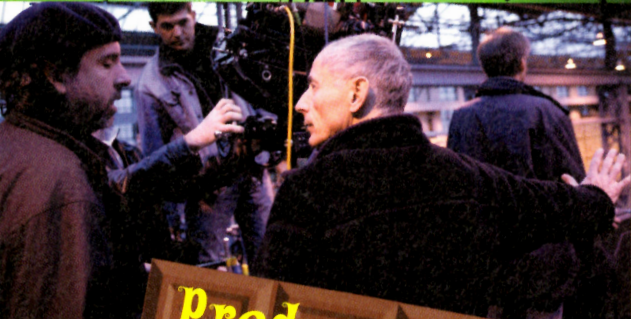
「撮影はまるでティムの頭の中にいるようだった」とケリーは言う。「毎日セットに行くたびに、アゴがはずれそうなくらい驚いたり、うっとりとしていたよ」

ティム・バートンが「ショー・ビジネスでいちばんの働き者」と呼ぶディープ・ロイは、ウンパ・ルンパ族全員をひとりで演じるというとんでもない役割を担うことに。「観客は全部CGだと思うかもしれないけど」とロイは言う。「その場面に20人のウンパ・ルンパがいたとすれば、僕が20通りの演技をしたってことだよ」

「ディープがこの作品でこなした仕事量といったら、まさに英雄的だった」とバートンもその仕事ぶりを認めている。

ウォンカの父、歯科医のドクター・ウォンカを演じたのは名優クリストファー・リー。息子の歯の健康を考えすぎるあまり、息子が甘い物を食べることを禁じたドクター・ウォンカについて「児童虐待というわけではないよ」とリーは言う。「彼はそれが息子のためだと思ってやったんだ。だが、あまりにも厳しすぎたため、幼い少年にとってはむしろ不安を抱かせる存在になってしまったんだな」

「僕はクリストファーの映画を観て、憧れて育ったんだが、彼は偉大な俳優というだけではない。あらゆる意味で彼はとにかくものすごく存在感があるんだ」とバートンが言う。バートン、デップと『スリーピー・ホロウ』(99)で組んでおり、『ティム・バートンのコープスブライド』(05)にも出演しているリーはバートンについて「ティムはとても情熱的な監督だ。カメラの向こうからいつも俳優を励ましてくれているのが感じられる。驚くほど独創的で、すばらしいハートをもった人だよ」

実際、セットで休むことなく動き回り、毎日膨大な仕事をこなしていたバートンに、ヘレナ・ボナム=カーターがジョークで彼に万歩計をプレゼントしたくらいだ。「ヘレナはティムが1日に何歩、歩くのかを知りたかったんだ」と言うフレディー・ハイモアは、こう思い返す。「ティムは仕事で十分に歩いたから、ジムに行く必要がなくなったんだって」

オカシなウォンカの世界の構築

「ブルーやグリーンのスクリーン・エフェクトに頼りすぎず、僕たちはできるだけセットを作ることにした」とバートンは語る。「ほとんどのセットは360度作ったので、俳優たちは実際にその環境に囲まれたんだ」 だが、ダールが思い描いていたものを作るのは簡単なことではなかった。

バートンができる限りCGではなくプラクティカル・エフェクトで作りたいと望んだため、スクリーン上に登場する多くのものは、補装具と特殊効果監修のジョス・ウィリアムズによる特殊効果で実際に作られた。「実際に作り出す限界に達すると、僕たちのデジタル技術の出番」と語る視覚効果監修のニック・デイビスは、「セットで実際に作り出せないあらゆるもの」を最新のモーション・キャプチャー技術とCGIで融合させるプロセスを担当。「すべての始まりはティムなんだ。彼がすべてのアイディアを出し、自分が望むものを何度も絵に描いて僕たちに見せてくれたおかげさ」

視覚効果では、早い段階での計画と進行時の綿密なコミュニケーションが重要だ。複数のセットがスタジオの野外撮影地で、コンピューターの中で、そして24分の1の大きさのミニチュア・モデルの中で同時に作られ、使われた。美術のアレックス・マクダウェルは砂糖菓子の舟を例に出して言う。「あの舟はチョコレートの川から白いトンネルの急流に入っていく。チョコレート室の内部は実際のセットだが、トンネルの中はすべてCGで作られているんだ。舟をまずブルー・スクリーンの前で撮影し、それをまた複製し、CGIで作らなければならなかった。僕は2～3か月かけて、CG制作会社やミニチュア・モデル制作会社と緊密に協力し合い、同時に3Dや実際のモデル制作者たちとデザインを練ったんだ」

チョコレートの川

「チョコレートの川についてティムがもっとも重視したのは、十分食べられそうに見えること」だったと言うジョス・ウィリアムズ。「だから、僕たちはそれを実現すべく知恵を絞ったんだ。できるだけおいしそうに見えるようにね」

チョコレートを別の場所で作って運び込むという案はすぐに消えた。流れるチョコレートのためには常に76万リットル以上の供給が必要となり、タンクローリーが40台必要という見積もりが出たからだ。そこで、現場で製造し貯蔵することになったが、チョコレートを混ぜ合わせるためには、従来のセメント・ミキサーでは十分でないことが判明。彼らが見つけたのは皮肉にも練り歯磨きミックス用の業務用の大桶だった。これなら膨大な量を混ぜ合わせ、貯蔵できたのだ。

具体的なレシピは明らかにしないが、ウィリアムズは水とダイエット用セルロースの混合物にさまざまな食用色素を混ぜ、いかにもチョコレートに見える外見と質感を実現させた。キャストとスタッフが扱い、食べても安全だということを確実にするため、一度作られた混合物は頻繁に消毒され、地元のラボで毎日テストされた。

誰もが気になるウンパ・ルンパ族

ウンパ・ルンパ族に生命を吹き込むためには、エフェクト担当者全員の全面的な協力が必要だったが、すべてはひとりの男から始まった。ウンパ・ルンパを演じるディープ・ロイだ。

スクリーン上のウンパ・ルンパたちはすべてロイが演じている。それぞれのウンパ・ルンパ用に彼はスタート位置をずらし、モーション・キャプチャー・ステージですべてのウンパ・ルンパを演じ分け、その身体と顔の動きがコンピューターに記録された。ウンパ・ルンパが歌って踊る場面は、何か月もかけて音楽に合わせてダンスが細かく振り付けられ、ロイがほんの少しずつ身振りや表情を変えながら、並んだウンパ・ルンパ1人ひとりの位置からステップを踏む。あとですべてが合成されると、そこには見事なダンス集団が出来上がるのだ。

さらに事を複雑にしたのは、ウンパ・ルンパ族の身長だ。担当のマクダウェルはこう語る。「常に身長75センチというものを意識しなければならず、手で持つ道具や通路、建造物がウンパ・ルンパの身長に合ったものでなければならなかった。ディープは実際はその2倍の身長がある。だから、ウンパ・ルンパのサイズと、ディープのサイズの2つの環境が必要だ。ウンパ・ルンパを人間と同じ環境に置く場合、人間にとってはとても小さいが、ディープにとっては大きく見える小道具を使わなければならなかった」

また、セットにはウンパ・ルンパの電動パペットが合計20体用意され、工場内の各部屋に1体ずつ配置された。パペットは頭蓋骨にモ

ーターが仕込まれ、目と頬を本物らしく動かすことができ、胸の下に埋め込まれた遠隔操作の装置で頭、首、そして四肢を動かすことができる。パペットのあまりのリアルさに、ロイ自身さえ初めて見たときは唖然とした。「あいつらはしゃべれるし、目や口を動かせるんだ。思わず、『待てよ、これで僕はお払い箱か？　パペットだけで用が足りるかもしれないぞ』と思ったぐらいだ」

想像を絶するリスの調教

「何をしなければならないかを知ったとき、僕はちょっと唖然とした」と言うのは、アニマル・トレーナーのマイク・アレキサンダー。『PLANET OF THE APES／猿の惑星』(01)でチンパンジー飼育担当者として活躍した彼は、再びバートンと仕事ができることを喜んだが、それと同時にこうも考えた。「リスは訓練しやすい動物ではない。それを100匹というのは想像できなかった」

アレキサンダーのチームは動物愛護協会の担当者が目を光らせる中で、19週にわたりひとりが1匹にかかりきりで訓練をおこなった。イギリスの個人宅から来たリスもいたが、大部分は地元の動物保護シェルターから採用されたリスだ。知能が高いのは間違いないうえに、「驚くほどカメラ映りがいい」とアレキサンダーが証言するリスだが、扱いにくいことでも有名。自立心が強く、行動の予測がつかないため、「決められた複雑な動作をするのは得意ではない」と彼は語る。「リスはじっと座っているのが好きじゃないし、ひとつの場所に留めておくのが難しい。最初の2週間ぐらいは、彼らをケージから出して僕たちと座っていさせることだけに費やしたよ」

「僕たちは少しずつ前進する方法をとった」と彼は続ける。「リスたちが僕らと座っていることに慣れてきたら、次の段階に進んだ。まず、くるみを拾い、それを金属のボウルに入れることを教えた。その動作を覚えたら、ボウルをベルト・コンベヤーに変える。リスたちはいったん基本的なコンセプトをつかむと、どんどん覚え始め、動作としてまとまるようになってきたよ」

リスには1匹ずつ名前があり、すぐにそれぞれの個性や才能が現れ始めた。「どのリスも覚える能力があったが」アレキサンダーは思い出す。「くるみを拾うことにまったく興味を示さないリスたちがいる一方で、一度手にしたら放そうとしないリスたちもいた。"くるみの達人"になろうとしないリスたちはベルーカに向かって床を走っていく練習をした。一番頭のいいリスたちがくるみ選びをやったんだ」

最終的にスクリーン上に登場するのは、動物としての動きを引き出すための40匹のやんちゃな本物のリスに加え、巧妙に作られたアニマトロニクスとCGなどの画像をうまく融合させたものとなった。

ティム・バートンと名作曲家ダニー・エルフマンの11回目のコラボレーション

本作の独特なテーマ音楽と、ロアルド・ダールのウンパ・ルンパの詠唱に曲をつけて4つの印象的な歌に仕上げたのは、作曲家でミュージシャンのダニー・エルフマン。歌声もすべて、エルフマン自身が担当した。

「それぞれの子供の歌に独自の雰囲気を与え、それぞれまったく異なる方向性をもたせるのが難しかった」とエルフマンは振り返る。「オーガスタスの歌は、派手なインド映画からヒントを得た。チューインガムかみまくりのバイオレットには、70年代のレトロでファンクな感じ。マイクの場合は、注意力が散漫で、ビデオゲームに夢中な荒っぽい少年らしく、激しくてハイな感じが必要だった。ベルーカはゴミの滑り台を落ちていき、詩が魚の頭なんかのことばかりなので、メロディーはそれと対照的にとても甘ったるい感じにしたらどうかとティムが言ったんだ。それで、60年代風のヒッピー的なハッピーさがある、サイケ調のラブ・ソングの方向で作った」

エルフマンは、バートンの長編映画デビュー作『ピーウィーの大冒険』(85)以来20年にわたり、バートン作品に数々の名曲を提供してきた。バートンはエルフマンについてこう語る。「彼の音楽は僕にとっての道しるべなんだ。ストーリーのさまざまな要素の意味を明確にし、それをまとめる助けになっている。ある意味で、彼は映画のもうひとりの俳優ってとこかな」

「僕たちは長いこと一緒に仕事をしてきたから、僕が相当クレイジーなことをやっても彼はショックを受けないよ」とエルフマンは言う。「今回の歌に関しては、ティムと僕は特に密接に連絡を取り合いながら仕事を進めた。こんなに楽しく仕事ができたことは初めてだった。ほんとにすばらしくクレイジーな時を過ごせたよ」

CAST

Willy Wonka : JOHNNY DEPP
Charlie Bucket : FREDDIE HIGHMORE
Grandpa Joe : DAVID KELLY
Mrs. Bucket : HELENA BONHAM CARTER
Mr. Bucket : NOAH TAYLOR
Mrs. Beauregarde : MISSI PYLE
Mr. Salt : JAMES FOX
Oompa-Loompa : DEEP ROY
Dr. Wonka : CHRISTOPHER LEE
Mr. Teavee : ADAM GODLEY
Mrs. Gloop : FRANZISKA TROEGNER
Violet Beauregarde : ANNASOPHIA ROBB
Veruca Salt : JULIA WINTER
Mike Teavee : JORDAN FRY
Augustus Gloop : PHILIP WIEGRATZ
Grandma Georgina : LIZ SMITH
Grandma Josephine : EILEEN ESSELL
Grandpa George : DAVID MORRIS

CREW

Directed by : TIM BURTON
Screenplay by : JOHN AUGUST
Produced by : RICHARD D. ZANUCK / BRAD GREY
Executive producers : PATRICK McCORMICK / FELICITY DAHL
MICHAEL SIEGEL / GRAHAM BURKE / BRUCE BERMAN
Director of Photography : PHILIPPE ROUSSELOT, A.F.C./A.S.C.
Production Designed by : ALEX McDOWELL
Edited by : CHRIS LEBENZON, A.C.E.
Costume Designer : GABRIELLA PESCUCCI
Music by : DANNY ELFMAN
Visual Effects Supervisor : NICK DAVIS
Casting by : SUSIE FIGGIS

キャスト

ウィリー・ウォンカ： ジョニー・デップ
チャーリー・バケット： フレディー・ハイモア
ジョーおじいちゃん： デイビッド・ケリー
バケット夫人： ヘレナ・ボナム＝カーター
バケット氏： ノア・テイラー
ボーレガード夫人： ミッシー・パイル
ソルト氏： ジェームズ・フォックス
ウンパ・ルンパ： ディープ・ロイ
ドクター・ウォンカ： クリストファー・リー
ティービー氏： アダム・ゴドリー
グループ夫人： フランツィスカ・トローグナー
バイオレット・ボーレガード： アナソフィア・ロブ
ベルーカ・ソルト： ジュリア・ウィンター
マイク・ティービー： ジョーダン・フライ
オーガスタス・グループ： フィリップ・ウィーグラッツ
ジョージナおばあちゃん： リズ・スミス
ジョゼフィーンおばあちゃん： アイリーン・エッセル
ジョージおじいちゃん： デイビッド・モリス

クルー

監督： ティム・バートン
脚本： ジョン・オーガスト
製作： リチャード・D・ザナック、ブラッド・グレイ
製作総指揮： パトリック・マコーミック、フェリシティー・ダール
マイケル・シーゲル、グレイアム・バーク、ブルース・バーマン
撮影： フィリップ・ルースロ、A.F.C./A.S.C.
美術： アレックス・マクダウェル
編集： クリス・レベンゾン、A.C.E.
衣装デザイン： ガブリエラ・ペスクッチ
音楽： ダニー・エルフマン
視覚効果監修： ニック・デイビス
キャスティング監督： スージー・フィッギス

2005年9月10日発行
発行承認:ワーナー・ブラザース映画
編集・発行:松竹株式会社 事業部
デザイン:吉田絵美[E-graf]
印刷:日商印刷株式会社
定価:700円（税込）

Credit

Soundtrack

『チャーリーとチョコレート工場』
オリジナル・サウンドトラック
品番:SL-72264／価格:¥2,520(税込)／¥2,400(税抜)
発売元:ワーナー・ホーム・ビデオ

ダニー・エルフマンが贈る、おいしいサウンドトラックも好評発売中！ 映画の独特なテーマ音楽とウンパ・ルンパ楽曲を収録！ 何度も繰り返し聴きたくなる、ファン必聴の1枚！

Charlie AND THE CHOCOLATE FACTORY™

1 下敷き ¥300
商品コード 1709101
表：ポスターアート
裏：オリジナルデザイン
B5サイズ

2 クリアファイル ¥350
商品コード 1709102
A4用サイズ

3 携帯ストラップ ¥800
商品コード 1709103
金券とキャンディをモチーフ
金券プレート：メタル製
キャンディ：ポリレジン製
全長約4.5cm

4 キャンディキーチェーン ¥800
商品コード 1709104
キャンディのぬいぐるみ
ぬいぐるみ：布製
マスコット：アクリル製
全長約11cm

5 バスビーズセット ¥450
商品コード 1709105
3個入り
・ローズ
・グリーンアップル
・ピーチ
の香り

※ウォンカのサインプリント

Willy Wonka.

※軸部分に色とりどりのビーズ入り

6 ウォンカのステッキペン ¥900
商品コード 1709106
ウォンカの持っているステッキのレプリカ風ボールペン
プラスチック製
全長約16.5cm

※便せんは3つ折にするとチョコレートのパッケージになります

7 レターセット ¥500
商品コード 1709107
ウォンカチョコレートのパッケージをデザイン
便　箋：2種類各5枚(12.8cm×18cm)
封　筒：4枚(15cm×10cm)
シール付

劇場オリジナル商品のご案内

全国の上映劇場で販売されています。
(一部劇場・商品を除く)

お買い求めになれなかった方は下記の方法でお求め下さい。
★表示価格はすべて税込みとなっております。
★商品数には限りがございます。品切れの際はご容赦下さい。
★掲載の商品は参考商品ですので、実物とは色・形が異なる場合がございます。

〈ハガキによるお申し込み〉
☆ハガキでのお申し込みの場合は下記入例をご参照下さい。
（商品コード記入の必要はありません。）
☆お客様都合のご返品の場合、返送料はお客様負担でお願い致します。
（商品到着後1週間以内にお願い致します。商品開封後の返品はご遠慮下さい）
☆商品のお届けまでには、受付後30日から40日かかる場合がございます。
☆受付は先着順とさせていただきます。
☆商品発送の期日指定は致しかねますのでご了承下さい。
☆お支払方法:代金引換のみとなります。宅配スタッフが商品を届けた際に、商品代金+梱包発送料〈一律800円〉の合計金額をお支払い下さい。
☆お申し込み締切日：平成17年12月末日 消印有効
☆ハガキでのお申し込み先＆お問い合わせ先
(株)松竹サービスネットワーク「チャーリーとチョコレート工場 通販」係
〒104-0045　東京都中央区築地4-1-1
TEL：03-5550-1689(土日祝を除く月～金 10～12時／14～17時)
※お電話・E-mail(携帯電話のメールも含む)でのお申し込みは承っておりません。

〈携帯電話によるお申し込み〉

「Movieモバイルストア」
お手軽！ケータイで“チャーリーとチョコレート工場”グッズをGETしよう!!
サイトにアクセスして商品コードをダイレクト入力！
◆アクセスはこちらから⇒ **http://mmst.jp**
（iモード・EZweb・ボーダフォンライブ！の3キャリア対応／一部未対応の機種がございます）
◆対応機種をお持ちの方はこちらのQRコードを ⟹
ご利用下さい。
◆公式サイトからのアクセスはコチラ!!
【iモード】
メニューリスト→音楽/映画/芸能→映画情報→Movieモバイルストア

【EZweb】
EZトップメニュー→ショッピング&オークション→auでオカイモノ→ホビー→映画→Movieモバイルストア
【ボーダフォンライブ！】
メニューリスト→ショッピング・チケット→キャラクター・コレクション→Movieモバイルストア

Movie モバイルストア
松竹公式サイト オリジナル Movieグッズが 盛り沢山!!

〈インターネットによるお申し込み〉
アドレス：www.shouchiku-goods.net よりご注文下さい。
商品の発送方法、代金のお支払いなどはハガキによるお申し込みと同条件となります。

商品企画製作　松竹(株)事業部

ティム・バートン ナイトメアー ビフォア クリスマス

パンプキン・キング

Developed in association with Tim Burton
共同制作:ティム・バートン
Art direction by Deane Taylor
アートディレクション:ディーン・テイラー

2005年9月8日(木)発売

希望小売価格5,040円(税抜価格4,800円)

GAME BOY ADVANCE

完全描き下ろしの新しいストーリーがGBA(ゲームボーイアドバンス)で登場!

ブギーを探せるか?! サリーを救えるか?!

映画版のちょっと前のお話…

パンプキン・キングのお披露目を明日に控えたジャックを誘拐しようと企てたブギー。しかし、手下の間違いでジャックに想いをよせるサリーをさらってしまいました。怒ったブギーはハロウィン・タウンに『バグ(虫)』を送り、明日のハロウィンをめちゃくちゃにしようと計画します。
ジャックはブギーの居所を探し、サリーを無事救出できるのでしょうか?

個性的な敵キャラと戦える!

次々と展開するストーリー

巨大な敵と熱い一戦!

美しいグラフィックも楽しめる

オリジナル・ポストカード5枚組

映画のアートディレクターでゲームにも参画したディーン・テイラーが、GBA用に新たに描き起こしたイラストをポストカードにしました!
※実際の製品とは異なる場合がございます。

コレクターズ・エディション
メーカー希望小売価格
¥3,800(¥3,990税込)
2005年11月23日発売・期間限定出荷
豪華特典映像を収録!
ピクチャー・ディスク仕様
発売元:ブエナ ビスタ ホーム エンターテイメント
www.movies.co.jp

発売元:株式会社ディースリー・パブリッシャー
http://www.d3p.co.jp/
〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂1-9-5
渋谷スクエアA 2F TEL:03-5428-3455(代)

ご質問に24時間無休で対応[ユーザーサポートサービス]
東京:03-5428-3458/名古屋:052-774-0638
※ゲームの攻略、裏技等に関する質問にはお答えできませんので予めご了承ください。

WARNER BROS. PICTURES PRESENTS
IN ASSOCIATION WITH VILLAGE ROADSHOW PICTURES A ZANUCK COMPANY/PLAN B PRODUCTION A TIM BURTON FILM JOHNNY DEPP "CHARLIE AND THE CHOCOLATE FACTORY"
BASED ON THE BOOK BY ROALD DAHL FREDDIE HIGHMORE DAVID KELLY HELENA BONHAM CARTER NOAH TAYLOR MISSI PYLE JAMES FOX WITH DEEP ROY AND CHRISTOPHER LEE
MUSIC BY DANNY ELFMAN COSTUME DESIGNER GABRIELLA PESCUCCI EDITED BY CHRIS LEBENZON, A.C.E. PRODUCTION DESIGNED BY ALEX McDOWELL DIRECTOR OF PHOTOGRAPHY PHILIPPE ROUSSELOT, A.F.C./A.S.C.
EXECUTIVE PRODUCERS PATRICK McCORMICK FELICITY DAHL MICHAEL SIEGEL GRAHAM BURKE AND BRUCE BERMAN SCREENPLAY BY JOHN AUGUST
PRODUCED BY BRAD GREY RICHARD D. ZANUCK DIRECTED BY TIM BURTON

PLAN B